

マッドでヤベーやつ
にしか変身できないん
だが 外伝

ジューク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※この小説は『マッドでヤベーいやつにしか変身できないんだが』に出てくるスレ民たちのストーリーとなっております。

※先に本編を読むことを勧めます。

※たまにしか投稿しません。

以上の事をご了承した上でお楽しみください。

本編はこちら←

h
t
t
p
s
:
/
s
y
o
s
e
t
u
.
o
r
g
/
n
o
v
e
l
/
2
7
5
1
5
1
/
/

目次

filel 『デスゲー上等！ワイ、参

上！』 76

プリキユア世界の怪人王 ID:kA1

音速のトレーナー ID:O21s a M

ZinriDeR

a N

第1話 『七色ヶ丘市の怪人』 1

第1話 『チームミーティアの日常』

第2話 『戦う理由、厳しさの裏』

92

18

世界を旅する飛行タイプ使い ID:l

第3話 『再会、そして答え合わせ』

6 a M a G a g A I B o

33

第1話 『翼は駆ける、蒼空を』

第4話 『戦いの果て、改めてよろし

108

く』 45

第2話 『次なる旅路、それってE a s y

第5話 『驚け！ぶち抜け！パズル解

?』 121

け！』 57

電脳空間の時喰王 ID:N A n d E 8

米花町のスパイダーマツ ID:I t o

2 k a I A r a I

f i l e e l : 『米花町の親愛なる隣人』

136

東京皇国のゴーストライダー I D : h

E l b A l K 3 l 5

第壱話『裁炎の骸』

149

プリキュア世界の怪人王 ID : k A l z i n r i d e

R

第1話 『七色ヶ丘市の怪人』

俺は暗宮くらみや 耀真ようま。現在19歳のFX稼ぎの転生者だ。スレではプリキュア世界の怪人王ってコテハンで通して貰ってる。

俺の特典は怪人。仮面ライダーに存在する数々の怪人や怪人ライダーに変身できる。

まあ、性格は良いと自負してるが見た目は怪物だから、助けても泣かれるだけなんだがな。

つい最近引越してきたここは七色ヶ丘市という町だ。一言で表すなら平和。それに尽きる。誰だって平和が良い。

と、思ってたんだが…

「……………なんでこうなった…」

はい。さつそくドンパチ現場です。

なんかあからさまに煽り散らしてきそうなピエロ顔の空き缶のような何かとフリフリゴスロリ少女五人組がバトってますね。周りにはなんか黒い霧出てるし、それ吸った人がめっちゃヤネガティブになってるし、もーカオス。

ちなみに俺は平気。てか逆に吸ったら元気澆刺オロナミンだよ。多分悪意か何かを誘発するのかな？だとしたら悪意をパワーに変えるアークゼロの力を持つ俺からすればいいご飯だ。てかなんか空き缶ピエロからミサイル出てきてプリキュアたち攻撃してるよ。

「……………マルチミサイルですかっつーの」

…まあ、あれは空き缶じゃなくてペットボトルなんだけだな。それはさておき。

「いつちよ行きますか」

手に持った赤い管が付いたベルト…ゼツメライザーを握り締め、俺は路地から飛び出した。

?????????

「待て待て待て待てーい!!」

突然響いた声にプリキュアたちのみならず、空き缶ピエロ…アカンベエとしわくちやのちびババア魔女…マジヨリーナは目を見開いた。

「どいういことだわさ!?!なぜバッドエンドエナジーが満たされたここで人間が!!」

「いやソイツらも人間だろ。てかこの辺りであんましドンパチすんのは止めてくれない

？ ま、仮に止めないってんなら……お仕置が必要だな」

【ゼツメライザー……！】

腰にゼツメライザーを装着した耀真はポケットから一つのデバイス……ゼツメライズキーを出し、スイッチを押した。

【BEROTHA……！】

「絶装」

【ゼツメライズ！】

【BEROTHA MAGIA……！！】

【A^大 big^鎌 | headed^を Magia^振 wield^る ing^う a^大 scythe^頭.^の a^マ scythe^ギ.^ア.】

耀真がゼツメライザーの横部を叩くとキーに赤い管が装填され、データが吸い取られ

る。そしてゼツメライザーから絶滅した昆虫『クジベローサー・テルユキイ』のロストモデルを内蔵した緑の管が耀真を包み、外装となる。

そして管が晴れると、耀真はカマキリのような見た目、両手に大きな鎌…トガマダーを持つ怪人…ベローサーマギアになっていた。

「なっ?!」

「虫いやあああああ?!?!?!」

なんか緑髪の娘が奇声上げてるけど、無視虫。

「…まったく、何かと思ったらコッチ側の奴だわさ。さっさとプリキュア共を始末しろだわさ!」

「……………ま、最初は誰でもそうなるよな」

コリコリと頭部を掻いた耀真はトガマダーをゆつくりと構え、宣言した。

「…悪いが、俺の敵はお前だ……よッ!!」

その言葉と同時に耀真はトガマードーを振り、緑色の斬撃をアカンベエに向かって発射した。

「ベエエエエ
!!!??」

ゴギンと金属音と火花を出しながらアカンベエは後ろによろめく。その隙を見計らった耀真はアカンベエ目掛けて走り出した。

「だったら死ねだわき!!」

「誰が死ぬかクソババアアアアア!!!」

そう叫んで放たれた火の玉を十字に斬り裂いた耀真はアカンベエに飛び乗り、仕上げに入った。

【ZETSUMETSU NOVA…!】

『ベローサストライク』！』

ゼツメライザーの横部を再度叩いた耀真はアカンベエを蹴って空へ跳び、まるでベ
ゴマのように回転しながら怒涛の攻撃を叩き込んだ。

そして耀真が着地した瞬間、遅れてアカンベエは幾つもの輪切りとなり、直後に爆発
した。

「またつまらぬ物をたくさん斬ってしまった…」

「……………ふ、ふざけるな!!お前みたいな怪物がヒーローにでもなった気か!?馬鹿馬鹿し
い!!お前なんてどこまで行こうと怪物だわさ!!」

ぜえぜえと荒く息をするマジョリーナに、耀真はゼツメライザーからゼツメライズ
キーを取って元に戻りながら振り向き様に答えた。

「…残念だったな。俺は俺を、一度でもヒーローだと思つたことはねえよ。俺は俺のた
めに戦う。たったそれだけさ。お前なんかの言葉でなびくとも思つてんなら、それこ

そ大間違いだ豆クソババア」

「誰が豆クソババアだわさ!!？」

「お前以外に誰がいるんだよ豆クソババア。そんなに気に入ったなら何度でも言ってるよ豆クソババア豆クソババア豆クソババア豆クソババア豆クソババア豆クソババアアアア!!!」

「ぶち殺すわさ！お前は絶対殺すわさ!!」

「やれるんならやってみろ!!」

【EVOL DRIVER!!!】

【COBRA!!!】

【RIDER SYSTEM!!!】

【EVOLUTION!!!】

耀真が腰に着けた回転式レバーと二つの歯車、半透明な円：エヴォリユーションチャージャーが特徴的な赤い装置：エボルドライバーに紅色と黒のボトル：コブラエボルボトルとライダーエボルボトルを装填し、レバーを回す。すると交響曲第9番をアレンジしたような音と共に、大きなプラモランナー：高速ファクトリーであるEVライ

ドビルダーが展開され、スーツを形成する。

【ARE YOU READY…?】

ベルトの不気味な、それでいて覚悟を問う合図に耀真は手を構えて答えた。

「変身」

【COBRA!!! COBRA!!!】

【EVOL COBRA!!!】

【フツハツハツハハハハ!!!】

「フェーズ1、完了…!」

金の歯車が重なり、遅れてランナーが重なると、歯車がグルグルと立体軌道状に動いて弾ける。そして星座表のような頭部…スタープランニスファイアや胸部の装置…特殊変換炉であるアーミラリアクター、蛇のような複眼…EVOTツインアイコブラを持つ宇宙

からやって来たライダー……『仮面ライダーエボル・コブラフォーム（フェーズ1）』に変身した耀真はゆつくりとマジヨリーナに向かい立つ。

「さあ、始めようか？」

「チツ……別の姿になったところで、お前のバッドエンドに変わりはないだわさ!!」

そう叫んでマジヨリーナは再度火の玉を放つ。火の玉は正確に耀真に迫り、直後に爆発した。

「ああっ!!」

「ヒヤハハハ!! あっけない最期だわ……さ？」

マジヨリーナは次の瞬間目を疑った。

無傷で先ほどの場所に立つ耀真を見て。

「……………ん？何かしたか？」

一瞬で距離を詰めて放たれた必殺キックをくらい、マジヨリーナは空の彼方へバイバイ菌とばかりに消えていった。

????????

「…ホームラン、とでも言うべきか?……ん?」

手を額に当てて流星となったのを見届けた俺が歩こうとすると、何か足に当たった。何やら赤い珠のような、宝石のようなアイテムだ。

「…んだこれ」

カチャリと拾ってまじまじと見ていると、何やら後ろから声がした。

「あ!星デコルでござる!!」

「星……?なんつった?デ、デコ……?星デコってどんなデコだよ。くっそダサそうだな」

「デコじゃないクル!デコルクル!!」

「コルだかクルだかどっちかにしろよ」

「そんなことは今はどうでも良いでござる!!それよりも、そのデコルを渡すでござる!!」

何やらリスみたいなマスコット?が騒いでいるが、ちよつと言いかちんとくるな
…。

「…どつちでもいいけどよ。人にも頼むんならもちつと言いかちんあるんじゃねえか?」
「今はそれどころじゃないでござる!!」

…よし、決めた。

「あつそ。んじややーめた」

『!?』

「こーうこーうこーうという事情なので、それをください」とかならあげたけど、こいつはダメだな。

「悪いが俺は小生意気な奴は嫌いなんだ。ものの一つも頼めないやつにやあげねえよ」
「…あ、あの、ごめんなさい…」

「私たちが謝るので、どうかそれを譲っていただけませんか？」

なんか桃髪の娘と蒼髪の娘が謝ってくるけど、そういうことじゃないんだよなあ…。

「俺はこのリスからの謝罪を求めているんだよ。自分の大切な物壊した子供の親がペコペコ謝ってるけど当の子供はまったく反省してなかったらどう思う？それと同じだ」
「リスじゃないでござる!!」

「……………もういいわ。話すだけ無駄だな」

そう言つて帰ろうとしたら、まあある程度予想できてたことが起きた。

「悪いけど、ウチらにも事情があんねん」

「そのデコル、渡してもらおうよ」

さつき奇声上げてた緑髪の娘と橙髪の娘が通せんぼしてきた。ま、そうなるよな。

「ちよつ、サニー！マーチも!!」

「だ、ダメだよ!!」

「……………はくそう来たか。…いいだろう…ッ!」

『なっ!?!』

ヒョイツとジャンプで二人を飛び越えた俺はそのまま一回転しながら着地し、エボルボトルをドライバーから引き抜いた。そして俺は白黒の装置を出し、それを向けて宣言した。

「今日がお前たちの命日だ」

【OVER THE EVOLUTION!!!!!!】

【COBRA!!!】

【RIDER | SYSTEM!!!】

【EV | REVOLUTION!!!!!!】

装置：エボルトリガーをドライバーに着けた俺は再びボトルを装填し、レバーを回した。すると先ほどのものとは違う銀の歯車が三つ、漢数字の三のように展開され、その周りを黒い何かの立方体を巻き込んだ嵐が吹き荒れる。

〔ARE YOU READY…?〕

〔変身〕

〔BLACKHOLE! BLACKHOLE!! BLACKHOLE!!!〕

〔REVOLUTION!!!〕

〔又ハハハハハハハハ…!!!〕

立方体が合体し、一瞬で消えたかと思つた次の瞬間、何もない空中から俺は再度現れた。仮面ライダーエボルとしての最強フォーム『仮面ライダーエボル：ブラックホールフォーム（フェーズ4）』に変身して。

先ほどのコブラフォームの上半身が白黒に変色し、ローブ：EVOベクターローブなどが追加され、より禍々しさが増した。無論すべてのスペックがコブラフォームとは桁違いだ。

「……………さあ、かかつてこいよプリキュア。格の違いを見せてやろう」

最初に関しちや、こんな魔王的第三者の立場はよくある話なんだよな。

第2話 『戦う理由、厳しさの裏』

「……………さあ、かかってこいよプリキュア。格の違いを見せてやろう」

その一言に、プリキュアたちは警戒と驚きを露にした。

「えっ!？」

「なんでウチらのことを…!？」

「俺も訳アリでな。…ここで暴れるのもあれだ。特設のバトルフィールドに招待しよう…ッ!」

耀真が地面に手を当てて力を入れると、空間がパラパラとどんでん返しのように幾つもの正方形に割れて回転し、あっという間に荒野へとその景色を変えた。

「……なら周りの被害を一切気にせず戦える…俺としても住み始めたばかりの街を潰したくはないんでな。だが、先に言うっておこう。今のお前たちじゃあ、俺には勝てん」

「……………そんなの、やってみなくちゃわかんないでしょ！『プリキュア！マーチシュー
ト』！」

緑髪のプリキュア…キュアマーチが放ったボール状のエネルギーが耀真に迫るが…

「ほい」

まるで羽虫を払うかのように左手で弾き飛ばされた。

「なっ!？」

「マーチの攻撃が、あんなにあっさりど…!!」

驚愕に包まれるプリキュアたちに、耀真はゆっくりとその口を開いた。

「……………幾つか聞きたいことがある、が…まずはこれだ。お前たちは理解しているのか
？」

「お前たちがやっているのは…戦争だぞ？」

…瞬間、プリキュアたちの時が止まった。

その眼にあるのは、疑念、困惑、そして…ほんのつまみの恐怖だった。

「…何言つて」

「もう一度言つてやる。お前たちがやってるのは戦争だ。国と国が自分たちの為に戦い
あう………これを人は戦争と呼ぶ。違うか？」

「………ツ私たちは」

「戦争なんかしていない、か？いいや違う。お前たちは戦争をしている国の片方のこと
しか知らない。だから自分たちは正義だと信じている。しかし、立場が変われば正義と
悪なんざいくらでも変わるもんだ。お前たちの正義は、さっきの豆クソババアの方から
すれば悪かもしれないぞ？」

「でも、バッドエンド王国は皆を悲しませて」

「もしそれが、自分たちが生きるために必要だったとしたら？まあ、さっきも言つたがお
前たちがやっているのは戦争だ。命が消えない戦争なんざこの世には無いんだよ。そ
して、その戦争の最前線にいるお前たちが死ぬ可能性だつて当然ある。それは来年かも

しれない。或いは一ヶ月後、或いは一週間後、或いは…明日かもしれない。それも死ぬのは一人だけじゃあないかもしれない…一人だけ？一気に二人？三人？四人？或いは………全滅？」

「お前たちがそれを理解してるとは、俺は到底思えない。お前たちに覚悟はあるか？隣りの仲間が死んでも、その屍を踏み越えて敵を倒す覚悟が…。それが戦争だ。決しておままごとやヒーローごっここの感覚で手を出していい問題じゃあない。戦うつてのはそういうことだ」

そう言うと、耀真はもう一つのエボルドライバーを取り出し、二本のボトル…ガトリングフルボトルとライダーエボルボトルを装填し、レバーを回した。

【機関砲！】

【RIDER—SYSTEM!!!】

【クリエーション！機関砲！】

【FINISH!!!】

【TEN!!】

【TWENTY!!】

【THIRTY!!】

【FORTY!!】

【FIFTY!!】

【SIXTY!!】

【SEVENTY!!】

【EIGHTY!!】

【NINETY!!】

【ONE—HUNDRED!!】

エボルドライバーを異空間に放り捨て、顕現された銃：ホークガトリンガーのバレルを十回回すと、銃口にエネルギーが蓄積されていく。そして耀真は徐に一人のプリキュア：青髪のキュアビューティにホークガトリンガーを向けた。

「まずは一人」

「!?」

「ビューティ、危ない!!」

「…いや、二人か」

「あああああああつ!!!」

橙髪のプリキュア…キュアサニーが庇うも、弾丸の雨は彼女たちを吹き飛ばした。

「ああつ!？」

「ぐうつ…」

煙が晴れると、そこには変身が解除された二人が横たわっていた。死んではいないが、ダメージはかなり大きいようだ。更に耀真は追い討ちとばかりにホークガトリンガーを投げ捨て、腰のエボルドライバーのレバーを激しく回す。

【READY GO!!!】

「これで…四人だ。ふっ!」

そう言って、耀真は空高くジャンプする。縦に回転しながら滞空する耀真の後ろに黒い穴のようにエネルギーが集中し、その体勢でグルグルと回転しながら耀真は黄髪のプリキュア…キュアピースに必殺技の『ブラックホールフィニッシュ』を叩き込もうとし

た。

「ピース！」

「ふええっ!!?」

【BLACKHOLE FINISH!!!!】

「ああああああっ!!!?」

【CHAO!!!】

マーチがとっさにピースを庇うが、思ったよりもエネルギーの範囲が広がったために二人纏めて吹き飛ばされる結果となってしまった。

「きやつ！」

「いっ…!?!」

そして地に伏した二人も元に戻り、残りは桃髪のプリキュア…キュアハッピーのみと
なってしまった。

「そんな…」

「覚えておけ。これから先、生きていけば自分たちじゃどうにもならないことや思い通りにいかないこと…理不尽なんざいくらでもある。その度に人は『そんな』と絶望し、『次は乗り越えてやる』と新たな希望を生むことで強くなる。この世界は、希望だけとか絶望だけとかでできちやいないんだ。希望も絶望も、両方あるからこの世界は唯一無二なんだよ。希望があるから絶望が現れ、絶望があるから希望は生まれる…もし、お前たちが俺に勝ちたいと思うなら、『己が戦う理由』を見つけてみる。それによつては…或いは、な。CHAO」

その言葉と共に耀真の姿は掻き消え、同時にハッピーたちは元の商店街の一角に帰っていた。

「……………『戦う理由』…」

ハッピー…星空みゆきの心の中で、その言葉が靄のように、何かのヒントのように残っていた。

?????????

帰宅した耀真はフラフラとリビングに向かいソファに座り込んだ。そして：

「(やつちまったあああ!!)」

両手で顔を覆いながら心の中でシャウトした。

「(マツジで何してんだ俺は!!?まだ戦争とかそういうのに疎いと言えど、JC相手に何をあんなカッコつけてイキり散らしてんだよ!!そりゃあ戦う理由とかは大事だよ!?命は大事にすべきだよ!?でもあれは違うだろうと考えてもおお!!しかも加減したとはいえブラックホールフォームとかどういう糞チヨイスだよ!!俺もうイツチに「暴走し過ぎ」とか言えねえよもおお!!)」

普段夕食を摂る午後7時になるまでの数時間、耀真はひたすら悶絶を繰り返していた。
?????????

「……………はあ……」

土曜日、一週間の食糧の買い出しをしていた俺は未だに前回のことを気に病んでいた。

だからこそ、前を歩くその人物たちに気づかなかつたのだろう。

「……………あ……………」

眼と眼が合う瞬間に

じゃねえよ馬鹿野郎。よりによってこのタイミングでコイツらとブリキキュアたちバッタリとかふざけんなよ神様オイ。

「あ〜っ！この前の!!」

ハイバれました。マジクソゲ。

取り敢えず全力ダツシユで逃げた。ご近所様たちめつちや変な奴を見る目だったな。まあそうだろうよ。端から見れば痴漢されたJ C軍団とその犯人、よくて大学生狩りだ。今時間かねえなそういうの。

「……………引つ越そうかな…」

引つ越して一週間でそんなことを考える程度には萎えてきていた俺でしたとき。

??????????

「…くあ〜」

あれから二ヶ月程が過ぎた。耀真も以前の自分の黒歴史を完全に忘れ去っていた。イミングだ。

「……………ん？これは…」

空が不自然に黒くなったことにすぐさまピンと来た耀真はムツと眉を潜めた。

「チツ、来い！『ライドクロッサー』!!」

通りの向こうから自走してきた、二台のバイクが合体したようなピークル：ライドクロッサーに飛び乗り、ヘルメットを被ってバイザーを下ろした耀真はギアを上げて空が曇り始めた場所の下…ちようど父の日記念の父子フアツションシヨールが開催されている会場へと向かった。

?????????

「…あれか」

こっそり顔を覗かせた先では、狐のぬいぐるみのようなピエロ顔の怪物が暴れていた。そしてそれと戦っているプリキュアたちの姿、更に以前の豆クソバアことマジョ

リーナと同格とおぼしきやけにへびメタなファッションの狼男がいた。

「(……狼男か……たしか、えーっと、ウルフルズ……いや違うな……あ、ウルフルンだけ。狼ならブレンで行きたいけど……いや、ここはあれか)」

ナツクルダスターのようなパーツが付いた銃……ブレイクガンナーを出した耀真は、狙いをウルフルンに定め、躊躇なく引鉄を引いた。

??????????

「ギヤアアアツ!!!?」

狼男……ウルフルンは突如として横から飛んできたエネルギー弾に撃たれ、地面に転げ倒れた。

「ぐ……いつたいなん……!!?」

憎々しげに道路の向こうを見ると、左右にバイクが取り付けられたようなビークル：ライドクロツサーが走ってきた。そしてドリフトするように回転して止まると、乗っていた男：耀真はスタイリッシュに降り、ヘルメットを外してライドクロツサーにかけ、ナツクルダスターのような銃：ブレイクガンナーを右手に持つてウルフルンの方を向いた。ウルフルンは最初は目を見開いたが、やがて納得したように不敵な笑みを浮かべて耀真と向き合った。

「ほう…お前がマジョリーナが言つてた人間か。なるほど、また俺たちを邪魔しに来たのか？」

「俺はただ平穩に過ごせりやそれで良いが、あの豆クソババアはそれを邪魔した。だから蹴った。お前も、俺の平和を邪魔すんなら…」

ガチャリとブレイクガンナーを構えると、耀真は徐に銃口を掌底で押し込む。そして、その手をブレイクガンナーから離すと同時に言い放った。

「殺す」

【BREAK UP】

耀真がブレイクガンナーから左手を離すと、一対のタイヤがグルグルと立体的に動き、耀真と横一直線状になる場所で停止した。直後、タイヤが細かいパーツに分離し、耀真を包む円柱状のエリアが展開され、ブレイクガンナーを持つ手を右に振り払うような合図と同時に紫の稲妻を放ちながら、耀真はバイクのエンジンのような禍々しいマスクと紫の外骨格のようなアーマールを纏った戦士：かつてプロトドライブとして人々を守ったが、最強級のロイミュードであるハートによってロイミュードの番人と化した機械戦士：『魔進チエイサー』へとその姿を変えた。ウルフルンは放たれる禍々しさに嫌な汗を額から流して問う。

「な、なんなんだ……テメエは………」

「俺は暗宮耀真。この街の番人。同時に………」

「…死神だ」

第3話 『再会、そして答え合わせ』

「……………！ねえアレ！」

アカンベエと戦っている時に、マーチが突然見当違いの場所を指差した。思わず他のメンバーがそちらを見ると、禍々しい戦士…魔進チエイサーと化した耀真とウルフルンが格闘戦を繰り広げていた。

「あれって、この前の？」

「姿が違いますけど…」

「ちよいちよい！今はそれどころとちやうで！」

不思議がる暇を敵が与えてくれるはずもなかったため、プリキュアたちは目の前のアカンベエとの戦いへと意識を戻さざるをえなかった。

?????????

「はあっ!!」

「ぐっ!?!」

一方、耀真とウルフルンとの戦いは終始耀真の有利だった。現在装備している『ファングスパイデー』による攻防一体の戦い方に対し、ウルフルンは爪での接近戦しか有効打が無く、その爪も耀真の装甲を突破できないためだ。

「追加だ」

【TUNE…】

【CHAISER COBRA…!】

ブレイクガンナーに紅い部品を持つミニカー…チェイサーコブラバイラルコアを装填してトリガーを引くと、ファングスパイデーが変形して、鞭…テイルウィツパーが自我を持っているように現れた。

「…、今度はなんだ!?!」

「むんっ!」

「ぬわ!?このぐがあっ?!」

耀真がテイルウイッパーを振り下ろすと、ウルフルンは横に跳んで避ける。しかし、すぐさま追撃してきたテイルウイッパーに弾かれた。

「…さて、そろそろあのデカブツを倒すか」

「…………ウルツフツフツフ…本当に良いのか?」

「あ?」

ヨロヨロと立つウルフルンの不敵な笑いに、耀真はメットの力で片眉を上げながら反応した。

「あのアカンベエの元となつているぬいぐるみはあのプリキュアの思い出の物だ。それを壊していいのか?何も言わずに潰させるのも一興だがな…ウルツフツフぐはあっ?!」

してやったりと笑っていたウルフルンに、耀真は再度テイルウイッパーの攻撃を叩き

込んだ。まったく反応できなかったウルフルンはそのままアスファルトの道路をゴロゴロと転がり倒れる。

「…そうか。わぎわぎ苦勞。むしろこちらとしては都合が良い。思い出が枷となっているなら、それは彼女が自力で乗り越えるべきもの。俺が出る幕ではない。つまり…」

「お前を潰すのに専念できるな」

そう言つて魔進チェイサーを解除した耀真は蒼いパーツに銀色のエンジンのマフラーのようなパーツ：ハイメタルマフラーが付いた装置：マツハドライバー炎を腰に装着した。すると、ライドクロツサーから黒いバイクの模型：シグナルチェイサーが自動走行してくる。それを片手でキャッチした耀真はマツハドライバー炎のスロット：フレームウインガードを引き上げ、そこにシグナルチェイサーを装填する直前に言い放った。

「変身」

「シグナルバイク！」

【ライダーー!!】

【チエイサー!!】

フレームウインガードを戻すと、先ほどのものとそっくりなタイヤが耀真の周りを旋回し、融合する。そして一瞬魔進チエイサーになったかと思った次の瞬間、バチバチと紫の光と共に殻を破るように弾け、耀真は銀色の戦士：『仮面ライダーチエイサー』に変身した。

「……………さあ、第二ラウンドと行こうか?」

「ちつきしよおお…んのやらア!!」

「ふっ!」

ウルフルンはやけくそとばかりに突撃し、二人の格闘戦が再開された。しかし、魔進チエイサーよりも機動力が増し、洗練された耀真の動きにウルフルンはついていけなかった。

「ぐはっ……………くそ……!」

「…………どうやら、向こうも無事に乗り越えられたみたいだな」
「なにつ!？」

耀真とウルフルンの視線の先には、爆発するアカンベエとそれを倒したプリキュアたちが立っていた。

「……………さあ、断罪の時だ!」

そう言うと、耀真は手をライドクロツサーの方へと翳し、目を光らせる。そして遠くに停められていたライドクロツサーのパーツがスライドし、紫の微光を放ちながら何かが飛んでくる。それを耀真は片手でキャッチした。

【シンゴウアックス!】

紫色の刃…ブレイクエッジの横に、青い文字で『ライダー専用』と書かれており、斧を持って仁王立ちする戦士と斧を振り下ろす戦士が、歩行者用信号機のように象られたランプ…E—コンディションランプを持ち、下部には信号機に付いてる赤いボタン…シンゴウプッシュボタンがある斧型武器…シンゴウアックスを構えた耀真はウルフルン

の前に再び立ち塞がった。

「断罪い?…………ふざけやがってええ!!」

「ふん!!」

「ぎゃあああああ!!?!」

飛びかかってくるウルフルンを、耀真は躊躇なくシンゴウアックスで斬り裂いた。ウルフルンの毛と鮮血が空を舞う。あまりの痛みに、ウルフルンは地面をのたうち回った。

「いでえええ!!?ちきしよお!!くくつああ!」

「……………さあ、選べ」

「ヒツ!?!」

「お前ら『バッドエンド王国』の情報を吐くか」

「今ここで死ぬかを」

「ヒツサツ!」

「マツテローヨ!」

マツハドドライバー炎からシグナルチェイサーを外し、シンゴウアックスのスロットに装填してシンゴウプツシユボタンを押し、地面に突き立てた耀真の発言に、ウルフルンは戸惑った。

「え？え、えと、それは……………」

「時間は有限、待ったなしだ。さあ、選べ」

「う、ううう……………」

「……………そうか」

そしてシンゴウアックスからレースのカウントダウンのような音が流れた直後…

「残念だ」

【逝ッテイーヨ!!】

断罪の合図が、放たれた。

「沈黙は後者と見なさせて貰う」

「ま、待て！待ってくれ！！わかった！話す！」

「言ったはずだ。『待ったなしだ』とな」

「ひいつ?!い、嫌だ！嫌だああああ!!」

ウルフルンは尻込みしながら命乞いをするが、耀真は無慈悲にも歩み寄った。そしてシンゴウアックスを振り上げ…

【フルスロツトル!!!】

「『マーチシュート』！」

「!?ぬうつ!!!」

ウルフルンの後方から飛んできたネオングリーンのエネルギー弾を縦真つ二つに斬る。エネルギー弾は空高く飛び、直後に爆発した。

しかし、シンゴウアックスはそれによりエネルギーを使いきってしまった。ウルフルンは泡を吹いて気絶している。それを見ることがなく、耀真はシンゴウアックスを突き立てて、通りの向こう…正確にはそこにいる五人のプリキュアたちを睨み付けた。

「……………一応聞こう。何のつもりだ？敵を…それも幹部であるソイツを庇うことが何を意味するか知っているのか？」

「そんなこと関係ない！私たちは、命を奪ったりなんかしない！」

「…?」

「あの後、私たちは皆でいっぱい考えた！私たちの戦う理由!!もう私たちは迷わない！困ってる人たちも、キャンディの国も、どっちも助けるって決めた！」

「……………そうか」

ハッピーの叫びに、何かを悟ったように笑った耀真は変身を解除し、また以前の隔離空間を生み出した。そして手を腰の前で何かをスキャンするように振ると、腰にベルト…ドライブドライバーが出現した。左手首にはブレスレット…シフトブレスが装着されている。

「……………なら、見せて貰おう。お前たちの覚悟を」

そう言って、耀真はドライブドライバーの赤いキー…アドバンスドイグニッションを回し、エンジンを入れる。そして、右手に持っていたミニカー…シフトネクストスペシャルを構えた。

「俺のミツ ションを開始する。変身」

【DRIVE!!TYPE NEXT!!】

耀真がシフトブレスにシフトネクストスペシャルを装填すると、ネオンブルーのエリアが展開され、黒い近未来的なアーマーが耀真を包む。そして仕上げに黄色と黒のタイヤが轆のように装着され、耀真は『仮面ライダーダークドライブ』に変身し、ブレイクガンナーと剣が合体したような武器：ブレイドガンナーを構えた。

「さあ、答え合わせとはいかがか」

第4話 『戦いの果て、改めてよろしく』

「いきます皆さん！作戦通りに！」

「了解!! 『プリキュア・マーチシユート』！」

「『プリキュア・サニーファイアー』!!」

「甘いー！」

【NEXT!!】

三人は一気に必殺技を放つが、耀真はドライブドライバのアドバンスドイグニッションを入れ、ドライブレスの赤いボタン：イグナイターを押して急加速し、その技を避ける。しかし、三人は執拗なまでに耀真を立て続けに追撃した。それを避けながら、耀真はある疑問を抱く。

「(妙だ：なぜ当てるに出来ない？いくらなんでも、ただエネルギーを無駄遣いしてるだけとは考えにくいけど：何のつもりだ?)」

「皆さん、今です!!」

「ハアアアアッ!!!」

「うおっ?!」

と、耀真が考えていた時。いきなり三人は耀真の進行方向の地面に壁となるように攻撃を当てた。突然の出来事に耀真は大きく地面を踏み締めて急停止する。

「ピース!!お願いします!!」

「う、うん! 『プリキュア・ピース』：!」

「なにつ!」

『サンダー』!!!」

「ぐあああああ!!!?」
「ぐはっ!!」

三人の後ろに控えていたピースは、耀真が急停止した時には既に

エネルギーを溜め終えていた。そしてタイミングを見計らったビューティの指示で、上から強烈な雷を落とす。耀真は急な出来事に対応できず、モロに雷を受け、吹き飛ばされた。地面をゴロゴロと転がり、アーマーからはバチバチと火花を散らしている。

「うぐつ………まさか………そういう……!!?」

驚愕を露にしてプリキュアたちの方を見た耀真は次の瞬間、ある違和感に気づいた。

「キュアハッピーがいない……」

ハツとして耀真が上を見た時には、もう遅かった。

『プリキュア・ハッピー』……!!」

「くうっ……舐めるなアアアアア!!!」

『シャワー』!!!」

上から降ってくる桃色のビームを、耀真はブレイドガンナーを構えて受け止める。そのままハッピーの必殺技と耀真のブレイドガンナーは押し合い圧し合いの拮抗を始めた。

「っ!!」

ピースの攻撃が本命と思わせつつ、真打ちは雷撃が止んだ直後に俺の真上にジャンプさせたキュアハッピーの全力必殺……ここまでしてやられたのは何時ぶりか……本当に、よくここまで成長したな」

ボロボロの体に鞭を振るい、よっこらせと立ち上がった耀真は、服に付いた土をパンパンと払いながら変身を解いたプリキュアたちに向かい立つ。そしてその内の一人……青木れいかは耀真に口を開いた。

「……………全部、私たちの為だったんですね」

「…勘も鋭くなっちゃったと来たもんだ」

自嘲気味に笑った耀真は、どこか清々したように話を続けた。

「俺としちゃあ、半端な年頃の子供……それも女の子に世界の命運なんてデカイモン背負わせて戦わせるなんざさせたかねえ。が……お前たちが戦わないと救えない命があるのもまた事実。だつたらせめて、お前たちが戦うことの意味……大いなる力には、それ相応の危険や責任が付き纏うってことをわからせた方が良く……そう思っただけだ。そして

お前たちは、俺の予想を良い意味で裏切ってくれた……合格だ。んで……テストであ
れ、俺はこうしてお前たちにしてやられ、敗者に成り下がったわけだ。全てを決めるの
は勝者。煮るなり焼くなり、好きにして構わん」

「……私たちはそんなことしないよ」

「……じゃあ、どうするんだ？」

腕を右手で頭をポリポリと搔く耀真に対し、少女たちは顔を見合わせ……

「これからは、一緒に戦ってよ！」

満面の笑顔で、そう言った。

「……全く、この年頃の女にや敵わねえな……ん？」

と、耀真が言った時、少女……みゆきの影からいつぞやのリスことポップが恐る恐ると
いった様子で顔を出した。それを耀真が怪訝そうな目で見てみると、みゆきが「ほら、前
に言ったじゃん」と耀真の前に引っ張り出す。それでようやく観念したのか、ポップが

しどろもどろながらも口を開けた。

「その…以前は嫌な言い方をして、すみませんでした…で、いっかん」

「……………ハイ」

「うわっ?!ととっ、と…これって!」

ポップの謝罪に、耀真はポケットから出した小さな宝石をみゆきに投げることで応えた。みゆきはアタフタしながらも投げられた物をキャッチして見ると…以前耀真が回収した星デコルが輝いていた。

「悪かったな。こっちもちよつとばかり熱くなっちゃってた。まあ、改めて、これからもよろしく頼むよ。CHAO」

耀真はいつの間にか右手に持っていた紫の銃…ネビュラスチームガンの引き金を引き、隔離エリアを元に戻しながら消えていった。

??????????

「……………ん？」

家の前までワープし、玄関を開けた耀真はある違和感に気づいた。

「……………誰かいる」

そうわかった耀真は、すぐさまネビュラスチームガンを構え、警察のように足音を殺しながら気配がするリビングに近づく。そしてドアを勢いよく蹴り開けてネビュラスチームガンを向けて叫んだ。

「動くな!!」

そこにいたのは…

「ハ〜ハツハ！祭りだ祭りだ！」

謎の機械が揺らす神輿に乗った、変人だった。

「……………はあ？」

「お！お前！今俺を見たな！これでお前とも縁ができた！！よかったな！俺との縁は良縁だぜ！」

「…って違エよ！！まずテメエは誰だよ！！！」

「ガツハツハ!! まあ、取り敢えずこれを見ろ! 預かってんだ!!」
 「何これ…手紙?」

謎の男のテンションに顔をひきつらせつつも、耀真は渡された手紙の封を切つて中を見る。そこには、こう書かれていた。

『拝啓耀真君。JC相手にブラックホールフォーム使ったことを見覚えていたことみたいな前座はほっぽいて、まず本題から入るね。簡潔に言うと、君最近ちよつと勝手多すぎるから、二つのペナルティを課します。一方は一時的だけど、もう一方は恒久的なやつなので、まあ…諦めてネ☆。一時的な方は…怪人への変身及びエボル系、アーク系、ストリウスへの変身を禁止します。これは今後の盛り返し次第で帳消しにするので御安心を。んでもう一つが、そっちに手紙を送つて貰った伝達役の妖怪縁結びの子…子つつつても君と同じ年だけど。の面倒見てほしいのよ。ある程度常識通用するし戦えもするけど、いつもそのテンションだから…その……頑張つてな(∥。ω。∥) B
 y 転生担当の神』

「……………あつ。」

手紙を最後まで読み終わった耀真は、ギギギと青年の方を向いた。

「そういうことだ！俺の名は『囉子祭我』！あよろしく、頼むぜイっ!!」
「……………（？）　　ペア」

これからのストレスに、耀真は、考えるのを、止めた…。

第5話 『驚け!ぶち抜け!パズル解け!』

7月7日、七夕。

天の川の両端の織姫と彦星が会える云々とされているが、とある男…暗宮耀真にとってはそんなことは心底どうでもよかった。現在彼はパソコンに向かって作業をしている。そのパソコンには、紫の携帯ゲーム機…ガシャコンバグヴァイザーが接続されており、何かのデータのやり取りをしていた。と、そんな耀真に、もう一人の男…囃子祭我が近づいてきた。

「おう、何してんだ?」

「ん?ああ…ちよつとダチからの頼まれ事をな。何すんのかはわかんないが…ま、アイツのことだし問題ないだろ。さて…取り敢えず休憩がてら、どっか行くか?」

「おっ!いいな!どっかで祭でもやってるといいんだがな!」

「確か今日って……あ、七夕か。神輿とかは期待できなさそうだが」

「構わねえさ！七夕と言えど、一年に一度きり！祭に変わりねえ!!行くぜいくぜえ!!」

がつはつはと笑いながら一階へ降りていく祭我に、若干げんなりとした顔で続いているく耀真であつた。

?????????

「しかし、どこもかしこも笑顔で溢れてやがる！平和が一番だぜ!!」

「ここ最近は変なことが起きてないしな……ん？」

二人が話しながら街中を歩いていると、耀真が見知った五人組の少女たちと出会った。

「あ！耀真さん！……と、誰？」

「お前！俺に話しかけたな!?!これでお前らとも縁ができたなア!!!」

「え?え!!?え?」

「女子中学生相手にお前は何しとん、じゃっ!」

「あだっは!!」

祭我の勢いにアタフタしていたやよいだったが、耀真は祭我の頭にチョップを叩き込み、後ろ首を掴んで猫のようにズルズルと引き剥がした。

「えつと…そちらの方は…?」

「コイツ? 囃子祭我ってんだけど…テンションがちよつとアレなやつでな。気にすんな。それより、お前たちこそどうした?」

「えつと…短冊を書きにくところなんです!」

「短冊ねえ…なんか無性に寿司食いたくなってきたな。晩飯寿司行くか」

「おっ!乙だな!!」

「お寿司!!」

寿司というワードに過剰に反応したのは、彼女たちの大食い担当こと緑川なおである。

「いいないいな〜…」

「……………テイクアウトなら買ってきてやるよ」

「ホント!? やった〜!!」

「あ〜! なおちゃんだけズルい!!」

「ホンマや! ウチも食べたいわ!」

「わかったわかった。五人分買っておくから。…お前らの住所とか知らないけどな」

「大丈夫です。私たち、今日の夜は皆で星を見に行く予定なので」

「星?」

れいかの話によると、今日の夜は彼女たちの秘密基地で星を見ることにしているそう
だ。

「よし、じゃあそこまで持ってってやるよ」

「…「ありがとう〜」ございます!!」

「夜遊びはほどほどにしとけよ〜」

「…「は〜い!」」

そう言つて、五人は元気に走つていった。

「ハツハツハ！意外と甘いところもあんだなあ！」

「うっせーわい」

?????????

回転寿司屋のテーブルで、二人は寿司を頬張つていた。

「んん！やつぱし寿司はエンガワだな!!」

「いや、俺はとろサーモンとメ鯖だわ」

「おっ！それもいいな!…:そーういやよ」

「ん？」

急に少し真面目な顔になった祭我に、耀真は怪訝な目を向けた。

「なんか…嫌な予感がするな」

「言うな言うな」

尚、この一食の会計は五人へのお土産込みで諭吉が二枚吹き飛んだ。

?????????

そうして現在…

「ホントお前はフラグしか立てねえよなあ！」

「ハツハツハ!!すまんすまん！」

「すまんて済むかバカタレ!!!」

成り行きを説明しよう。

二人がお寿司を届けに行く

←

皆でお寿司食べながら短冊を飾る

←

突然空が暗くなる

←

アカンベエと赤鬼出てくる↑今こ→こ←

「お前がマジヨリーナとウルフルンの言ってたバケモノかオニ!? まあ、俺の敵じゃあないオニ! 行け、アカンベエ!!」

『ベエエエ!!』

「そんじゃあ、詫びも兼ねて俺が行くかねえ!」

【ドンブラスター祭サイバー覇バ亜!】

「あ? 誰だオニあいつ」

「お前、それって…?」

「コイツか? コイツあ俺用のドンブラスターさ。使い方は…こうだな!!」

そう言った祭我は、一つの赤い渦の形の歯車：ドンゼンカイオーアバタロウギアをド
ンブラスター祭刃垂にセットし、ダイヤルを強く回す。

「ロボ頭チエンジ!!」

「いよおおっ!!」

「どん！」

「ドン!!」

「DON_ド!!!」

「どんぶらこおお
!!!!」

「アバタロウ！」

「ふんっ!!」

『…ええええええええええ!!?』

祭我が下にドンブラスター祭刃亜を撃つと、辺りが大量のスモークに包まれる。直後、上を見上げたその場の全員：赤鬼：アカオーニのみならず、プリキュアたち、更には耀真までもが絶叫した。なぜなら：

「ドン！ゼンカイオー!!!」

「よっ！全力ゼンカイ!!!」

祭我が巨大ロボになっていたのだから。

「えええええええ!? いやそっち?!?!? 何かとは思ったけど、そっち?!?!?」

「おう！こっちだぜえ!!」

ドスンと轟音を立てて高らかに笑う様は、中々に強烈なインパクトを持っていた。

「……………あ、お、おのれ！デカくなったからって調子に乗るなオニ！アカンベエ！やれ!!」

「アカンベエエエエ!!」

「さあ楽しもうぜ!!!」

そう叫んだ祭我…ドンゼンカイオーは左腕に装着された盾…アバターシールドでア

カンベエの攻撃を受け流し、右腕のブレード…アバターソードでカウンターを叩き込む。

「わああ…巨大ロボと怪獣の対決だあ…!」

「…つて観戦しとる場合ちゃうわ!」

「私たちも戦おう!」

「助太刀か!?!助かるぜ!!」

そう言うって祭我を中心に六人（五人と一体）はアカンベエを確実に追い込んでいた。

「さて…俺の相手はテメエか。赤達磨」

「誰が赤達磨だオニ!!」

「さてと」

「無視してんじやねえオニ!!!?」

怒るアカオーニを完全に無視し、耀真は黄色いダイヤル…アクチュエーションダイヤルが付けたゲームカセット…ガシャットギアデュアルを取り出し、アクチュエーション

ダイヤルを90度回す。

「ゲーム、スタートだ」

【PERFECT PUZZLE…】

【What's the next stage?】

アクチュエーションダイヤルを回転させると、ゲームタイトルが現れ、そこから絵柄が描かれた色とりどりのメダル…エナジーアイテムが周囲にバラ蒔かれる。

「な、なんだオニ!!?」

「変身」

【DUAL UP!!】

【Get the glory in the chain…】

【PERFECT PUZZLE!】

耀真がガシャットギアデュアルのスイッチ…デュアルアップスターターを押すと、黒

い面：GGハイパーモジュールから青いキャラクターが描かれたエネルギー盤が出現し、耀真を透過する。

そして耀真は、垂れた青髪のようなデザインが特徴のライダー：『仮面ライダーパラドクス：パーフェクトパズルゲーマー』に変身した。そして右腰に出現したホルダー：ギアホルダーにガシャットギアデュアルを挿し込む。

「…さあ、始めようぜ。最ッ高に心が踊る……エキサイティングなゲームを！」

「…ああ、始めてやるオニ。お前らがバッドエンドに染まるゲームだオニけどなあ
あああ!!!」

「よっ、と。ほいほいほいほい!!」

アカオーニが振り下ろした金棒を、耀真は軽々と避けて空中に手を翳す。すると、周囲に散らばっていたエナジーアイテムがパズルゲームの盤面のように均等に並び、耀真の手の動きに連動してスイスイと並び変わり、三つのエナジーアイテムが飛び出て耀真に吸収された。

【高速化！】

【鋼鉄化！】

【伸縮化！】

「よし…そいつ!!」

「ぐうっ!？」

「そらそらそらそらア!!!」

耀真が右の拳を放つと、右腕は物凄い速さでゴムのように伸び、アカオーニに迫る。アカオーニは咄嗟に金棒でガードするが、耀真はお構いなしに連続で金棒に拳を命中させる。その様はさながらどこぞの海賊マンガの主人公である。

「これでトドメだ!!」

【ジャンプ強化！】

【K I M E W A Z A !】

【DUAL GASHATTO!!!】

そうやって、祭我は右肩に付いた巨大なドンブラザーズギアを回転させて桃型のオーラを出し、アバターソードにエネルギーを溜め始める。オーラを真つ二つに切ると、肩に付いていた巨大なドンブラザーズギアが丸鋸のように回転しながらアカンベエに迫り、ガリガリと表面を削る。更に祭我本人は高くジャンプし、アバターソードを振りかざす。

耀真は追加でジャンプ強化のエナジーアイテムを吸収して空高く飛び、ダイヤルを回して再びギアホルダーに戻すと、足にエネルギーを溜めた。

「ドン！ゼンカイクラッシュユ！」

PERFECT

CRITICAL COMBO!

「おりやあああああ!!!」

「オニイイイイイ!!!?」

「ベエエエエエエエエエエ
!!!??」

ドンブラザーズギアに追加で放たれたアバターソードの斬撃によつてアカンベエは爆散し、デコルを排出する。更に耀真が放った必殺キックの乱舞で、アカオーニは自慢の金棒を根元から折られながら地面に叩きつけられた。

【ALL CLEAR……………!】

「あ、大勝利イイ!!」

「『んめでたしめでたし!』つてか」

【ガッシューーン”……………】

ドンゼンカイオーのまままで歌舞伎のように見栄を切る祭我に、半ば呆れたように腰に手を当てながら右手でガシャットギアデュアルを抜き、変身を解除した。祭我也も身体がどンドン縮み、いつもの姿に戻った。

と、その時である。

「クル〜〜!!」
『!?!』

聞き覚えのある悲鳴に、その場にいた全員が悲鳴の聞こえた方を見る。そこには…

左手でキャンディを捕え、右手でデコルデコールを持つトランプのジョーカーの格好をした男がいた。

「初めまして、プリキュアと……お邪魔虫の方々。私はジョーカー。にしても……お間抜けですねえ。まあ見ての通り、この子とデコルデコールは頂きました。それでは」
「っしまった!!」

変身を解除したのが仇となったのか。耀真がガシャットギアデュアルを操作する前に犯人……ジョーカーは暗闇の向こう側へと消えていった。

「キャンディ!! キャンディ……!!」

「……………完全に、一本取られちゃったな」

「……………」

暗闇へ手を伸ばそうとしたみゆきたち、虚空を見上げながら腕を組み、顔をしかめる

祭我、ガシヤットギアデュアルを持つ手を握り締める耀真。

その場に残されたのはそれだけだった。

電腦空間の時喰王 ID：NAndE8

file1 『デスゲー上等！ワイ、参上！』

『諸君は今、なぜ、と思っているだろう。何故私がこの様な事をしたのかと。私の目的は今、この瞬間に達成された。以上でソードアート・オンライン正式サービスのチュートリアルを終了する。プレイヤー諸君の、健闘を祈る』

「……………」

なんやこれ

もう一度言うわ。なんやこれ。

店でたこ焼き食つとつたら酔っ払いが急に大声出したせいでビビって喉にたこ焼き詰まらせて死ぬとかいうクソダサイ死に方とか関西人の鏡の死に方とか、とに

かく死んで気いついたらなんやこれ。

しかも何や？ S A Oの世界の…よりによつてクソベロン（※オベイロン）と肩を並べるレベルのいや並べたないけども。ネタキャラに転生してもうとるやんけ。キバオウつて…ナンデヤ以外になんか持ちネタあつたか？

てか今はそれどころやないわバカタレ。

どないしよ。マジでどないし…ん？

何やこれ？ アイテム欄に…ベルト？

にしてもこれどつかで見たことあるような…

ベルトと…：…：…パス？ 偉くゴージャスやな…

でも S A Oに電車なんて…：…：…ん？ 電車？

電車…パス…ベルト…キバオウ…牙オウ…

「…はあああああああ!!？」

??????????

「……………夢か」

朝。この世界に来た日の夢を見たキバオウ……時喰王ニキこと『井時 王牙』は目を覚ました。

彼が今いる場所は74層にある彼の拠点となつてゐる宿だ。彼は常に最前線の、なるべく目立たないような位置でレベリングに勤しんでいる。

「師匠。起きてますか?」

「ん?おおすまんナキリ。ちよい待つとれ」

キバオウがキリ、と呼んだのは、原作主人公のハーレムイキリトさんことキリトだ。

彼がキバオウを師匠と呼ぶ。この世界を知つてゐる人間ならあり得ないことが何故起きているのか、その全ての理由は第一層の攻略の時にある。

??????????

第一層の攻略会議。そこにキバオウはいた。

「皆！今日は俺の呼びかけに応じてくれてありがとう！知ってる人もいると思うけど、改めて自己紹介するよ。俺は『ディアベル』！職業は気持ち的に騎士ナイトやってます！」
「（気持ちでやったらアカンやろ。仮にもデスゲーやぞ？）」

広場の中心へと現れた青髪の青年……ディアベルが発したジョークに広場は多少の笑いや拍手であふれかえった。

「大したリーダーシップだな」

「今回は行けそうじゃねえか？」

「（…アカンな、これは）」

キバオウは、周りの目や声を見聞きし、そう結論づけた。彼からすれば、周りにはバカしかいないからだ。

「さて、こうして最前線で戦っているプレイヤーのみんなに集まってもらったのは他にもない……」

そう言つて、ディアベルは一呼吸おいてから続けた。

「今日、俺たちのパーティーが迷宮区の最奥に続く階段を見つけた。明日か明後日には第一層のボス部屋にたどり着く!ここまで来るのに一か月。俺たちは示さなければならぬ……!ボスを倒して、第二層へ行く……!始まりの街で待っている皆にいつの日か、このゲームがクリアできるということを示すために……!」

そうディアベルが意気込んだ瞬間、周りから拍手が巻き起こる。

が、キバオウは口をへの字に曲げた後、ハアとため息を吐いた。そして……

「アホかおどれら」

…瞬間、場が凍りついた。

「……キミはっ？」

「ワイはキバオウつちゅーもんや。あのなあ……ここは攻略会議の場や。余計な前座は要らん。ここにおける何名か、忘れとるんとちやうか？これはデスゲー。普段からピコピコやつとるスマホゲーと違って、HPが全損したら死ぬんやろ？物理的に。仮にも攻略

会議つちゅー大切なモンに出るんやったら、もーちよい危機感持つて貰わんとこつちが困るわ」

その言葉に、周りは何も言い返せなかった。場の空気を読まない彼への怒り以上に、彼の正論に対する反論も出なかったからだ。そして、キバオウは取り出した本をパンパ
ンと叩きながら更に続けた。

「それと、この無料配布の情報であった…あー、何やったか?…ああそうそう、『イルファ
ング・ザ・コボルトロード』やったか?これには『ボスの持つ四本のHPバーの内、最
後のバーが赤ゾーンになると、ボスは持っている武器と盾を捨てて腰にかけている
曲刀タルワールつちゅーのを使い始めて、そつから死ぬまではずつと曲刀スキルしか使わん』て書
いてあるけど…よく考えてみ?こんなデスゲーに人を大量に閉じ込めといて、『ボスと
かその他諸々の設定は弄りません』なんて都合の良い話あるか?断言するわ。ワイがG
Mやったら絶対に弄る。何故か?こうして油断しとる奴ら…それもボスを攻略しよ
うつちゅー力を持つとる奴らを潰すためや。流石に全部とまではいかんけど、頼り過ぎ
はアホ見るで。少なくともワイはこのSAOにおいては初心者や。けど他にも色々
ゲームしとる脳で考えると、序盤から検証もろくにない情報に寄生プレイしとると…死

ぬで?。」

その最後の一言で、大半のプレイヤーは俯いてしまった。

「…まあ、何にせよや。リラックスはええけど、必要以上にだらけさせるのは勘弁してくれゆうこつちや。ほな、後の仕切りは頼むで、ディアベルはん」

「……………あ、ああ……」

マイペースなキバオウに、ディアベルはただただ頷き、攻略会議の本題に入っていた。

?????????

そして迎えた第一層ボス討伐。今はディアベル率いるC隊とD隊がそれぞれ一本目と二本目のゲージを削り切り現在はF隊とG隊が主な火力となつて三本目を削っている。ここまでの討伐組の損害は、タンク役のA隊B隊のメンバーが何度かHPを半分にさせられた程度。赤の危険域に追い込まれたプレイヤーは0だ。

取り巻きの『ルインコボルト・センチネル』もキバオウが属するE隊とG隊が十分に余裕を持ちながら片付けることができているので、途中からはG隊をメインボス戦場の方へと回す。数十秒後、三本目のゲージが削り切られた。

「よし、ラスト一本だ!気を緩めずに行くぞ!」

ディアベルの声と同時にC、D隊のプレイヤーがF、G隊のプレイヤーと入れ替わり、
メに入った。キバオウたちE隊はいつでもサポートに入れるよう待機。キバオウは真剣にその様子を見ている。

遂に、最後のゲージがレッドゾーンになった。

「くっ!」

ディアベルの叫びと同時にコボルトロードは右手の斧と左手の盾を乱雑に投げ捨てる。

更に後ろ腰から抜き払ったのは、大きな曲刀…

…とは程遠い形状の『野太刀』だった。

「……………え?」

プレイヤーたちは目の前でコボルトロードが持つ武器の意味がわからず、固まってしまった。そんな茫然とした彼らを嘲笑うようにコボルトロードは垂直に飛び、空中で体を捻り、武器に力を溜めた。

「…マズい!! つんのやらっつ!!」

キバオウがディアベルたちの方向へと走り出した直後、コボルトロードは落下すると同時に蓄積したパワーを深紅の輝きに変えて竜巻のように解き放った。その行動から、コボルトロードが何をしようとしているか、キバオウはジャンプして体を捻った段階で気づいた。

カタナ専用ソードスキル、重範囲攻撃『ツムジグルマ旋車』。攻撃角が全方位、則ち360度あるこの攻撃は、周囲にいたC隊のプレイヤーを纏めて吹き飛ばした。更に追加効果のスターンが発動してしまう。

即時発動に加え、回復手段が存在しないこの状態異常を受けた時は、仲間がスイッチで敵のヘイトを引かなければならないのだが、ここまで続いていた楽勝モードがひっくり返った上に絶対的リーダーのディアベルが一撃で打ち倒されてしまったことによる動揺でほとんど誰も動けなかった。唯一動けたのはこの事態を予測できていたキバオウだけだ。しかし、そのプレイヤーたちの数秒の硬直が大技を放った後のコボルトロードの硬直を回復させる時間を与えることとなってしまったのだ。

「おいB隊ーはよヘイト集めんかい!!」

キバオウの怒号でハツとした褐色スキンヘッドのプレイヤーが急いでコボルトロードの攻撃を防ごうと盾を構えて前に出るが、もう遅い。

コボルトロードはそうはさせまいと目の前にいたディアベルを両手で握った野太刀を床すれすれから高く斬り上げるソードスキル『浮舟』ウキフネを放ち、ディアベルの身体を宙高く吹き飛ばす。

そのまま空中でディアベルを叩き斬り、トドメを刺そうと剣を振り下ろす。そう思われた時だった。

「ふんぬありやあああ!!!」

黄金の鋸：ガオウガツシャーで空中にいるディアベルを足場にするようにキバオウはコボルトロードの攻撃を受け止め、ドスンと大きな音と砂煙を立てて着地した。砂煙が晴れると、プレイヤーたちが見たのはディアベルを跨ぐような体勢で今も尚コボルトロードの攻撃を堪えているキバオウだった。そして：

「難波のド根性…舐めんなア！」

ガオウガツシャーで無理矢理野太刀の方向をキバオウから見て右に剃らし、キバオウのすぐ横に野太刀の一撃が炸裂した。キバオウはすぐさまこれ幸いとばかりにディアベルの胸ぐらを掴み、後方のE隊の方へ投げ飛ばした。

「早よポジション飲ませて叩き起こせ!!」

キバオウの指示で、プレイヤーたちへ慌ててディアベルに駆け寄る。それを見届けたキバオウはコンソールを弄り、一つの黄金のパス：マスターパスを手取る。

「ほんまやつたらこんな序盤のボスごときに使うつもりなかったんやが…特別大サービ
スや」

マスターパスをキャッチすると同時に、腰にベルト…ガオウベルトが装着され、落ち
着いた、それでいて壮大な音色の待機音が流れ始める。

「変身…！」

【GAOH FORM】

マスターパスをガオウベルトのバックルにセタッチすると、黄金のフリーエネルギー
が放たれ、キバオウを守るアーマー…オーラスキンや、オーラアーマー…ゲイターブレ
ストとなる。更に、キバオウの顔を包むマスクを縦に通る線路…ガオウレールの上を鰐
の頭部…電仮面が通り、正面で停止して展開される。

まるで鰐の顎が閉じるように複眼…ゲイタースキャンアイが形成され、キバオウは
『仮面ライダーガオウ』へと変身した。

「ワイ、参上!!」

これこそが、『SAOの世界』における、仮面ライダーガオウの伝説の始まりである。

音速のトレナー ID:O21s a M a N

第1話 『チームミーティアの日常』

中央トレセン学園。

『ウマ娘』と呼ばれる、異世界の名馬の名前と魂を受け継いだ不思議な存在、その中のエリート中のエリート約二千人が在籍している。

ウマ娘は頭にあるピンとした耳、腰部から出ている尻尾などを除けば見た目はほぼ女性だ。

その他にも彼女たちの特徴としては、人よりも優れた聴覚や食欲など色々あるが、何よりも特筆すべきはその脚力。

その脚力を活かし、彼女たちは数々のレースを繰り広げる。

人…ヒトではウマ娘より速く走れない。

それがこの世界の常識だ。

しかし、どんな世界にも例外は存在する。

そう、この男のように…。

?????????

放課後。学業を終えたウマ娘たちは皆一様にジャージに着替えてトレーニングに励んでいるが、その中でも特に目立つ存在があった。

「はっ、はっ…」

「いいぞー、そのペースを維持してー!」

トレセン学園に整備された実際のレース場を再現したコースを走る黒鹿毛と栗毛のウマ娘の視線の先で、某日曜のご長寿アニメのエンディングのようにピツピツとホイッスルを吹きながら後ろ走りで先導する男がいた。

本来であれば、絶対にあり得ない光景だ。二人のウマ娘：マヤノトップガンとライスシャワーはかなりのハイペースで走っていて、若干息を切らしてゐるにも関わらず、男：『チームミーティア』のトレーナーである『真波颯太郎』まなみ そうたろうはケロッツとして今も走っている。

彼はスレでは『音速のトレーナー』と名乗っており、その名前の通り彼の最高速度は音速に匹敵する。

ウマ娘と言えど、音速には敵うはずもない。そうこうしている間に颯太郎はゴールを最後まで後ろ走りで走りきり、5バ身ほど遅れて二人も同時にゴールした。その瞬間、颯太郎は両手にそれぞれ持っていたストップウォッチをピツと止め、二人に近寄る。

「芝2000mで2：09と2：08, 7……二人とも上出来だ。この調子なら次のレースも良い結果になりそうだな。マヤノはオークスカ」

「うん！あのねトレーナーちゃん！もしマヤノが一着だったら…マヤノとデートしに行こー！」

「!!」

目を見開き、茫然とするライスシャワーを置いて、マヤノはピヨコピヨコと颯太郎に詰め寄る。颯太郎はニコニコとそれに答えた。

「ああ、いいぞ。何処がいい？」

「えつとね、ネズミさんの遊園地！」

「デイズニールゾート？日帰りならオツケーだ」

「やった〜！」

「あ、あ、可愛え……」

ピヨンピヨンと跳ねて喜んだマヤノに颯太郎がほっこりしていると、もう一人のウマ娘…ライスシャワーも駆け寄ってきた。

「あ…あのねお兄様！」

「ん？どしたライス」

「あの、その……」

もじもじとしているが、言いたいことを大体察した颯太郎はライスの頭にポンと手を置いた。

「わかったよ。ライスも行きたいんだな」

「!!」

「ただ次にライスが入れそうなのは菊花賞だし……だいぶ先だけど、いいのか?」

「……うん!」

「そっか、了解」

こんなほっこりした光景も彼らの日常。

??????????

土曜日。チームミーティアには、毎週土曜日に行う一種のルーティンがある。マヤノとライスはテーブルでその時を今か今かと待ち望んでいた。

「はーい、フレンチトーストできたぞー」

「わく美味しそう!!」

「い、いただきます」

「いただきますーす!」

二人の前には、皿の上に山のように盛られた卵液をたっぷり使ったフレンチトーストとドライマンゴーとバナナがトッピングされたヨーグルト、一口サイズにカットされたウインナーが入ったスクランブルエッグと人参やその他野菜たっぷりのシーザーサラダが用意されていた。ドリンクはきな粉を溶かした牛乳だ。

カルシウム以外においては最高の栄養食と言われる卵をふんだんに使いながらも栄養バランスをきっちり考えられ、牛乳もきな粉を溶かすことでカルシウムを効率よく吸収できるよう工夫されており、見た目もとても豪華で食欲も増す。

いつも同じメニューではあるが、美味しさではカフェテリアや食堂を上回る程の朝食を食べてからトレーニングをするのが、このチームミーティアの土曜日なのだ。

「ほれーはーひゃんトレーナーちゃんほい美味しい!ひい!」

「ちゃんと飲み込んでから言いなさい」

「美味しいよお兄様」

「自信作だしな。よかったよかった」

幸せそうにフレンチトーストを頬張る二人に、颯太郎は今日も朝から癒されていた。

余談だが、この朝食目当てで彼のチームに志願しているウマ娘が約二名程（一名は他チームに入った）いるらしく、その内の一名は土曜日にチームミーティアの部室前を通る度にお腹から爆音を出しているそう。本人（ウマ）曰く、「美味しそうだ」とのこと。

?????????

「さーて、マヤノ!行くぞー!」

「おー!」

無事にオークスで一着、それもレコードを記録したマヤノへのご褒美として、颯太郎は自身の銀の愛車…マツダRX-7（FD3S）にマヤノを乗せてエンジンをかけようとした。と、そんな彼を呼ぶ声があった。

「ハイトレナー君。相変わらず良い趣味してるわね〜」

「ん？…おお、マルゼンスキーか。まあな。このシルバ^銀ブ^弾レ^丸ットみたいなカラーリングと武骨なフォルムが男心をくすぐるってもんよ。あと俺はお前のトレナーじゃねえ」

声をかけてきたのは、一見すると大人の女性だが、実際は学生であり、自身が持っている真っ赤なスポーツカーに時々理事長秘書のたづなや他のウマ娘を乗せてはかつ飛ばしているウマ娘…マルゼンスキーだった。

「で、アタシのスカウトの件考えてくれた？」

「俺の気が乗ったらつつつたる？聞きに来る時点でボツ！」

「ふう〜、釣れないわね」

「俺は簡単には釣れねえよ。そんじゃあ失礼！」

言い終わると同時に颯太郎はアクセルを勢いよく踏み込み、トレセン学園を後にした。

?????????

「…ん？」

ある日、部室でマヤノとライスと共にミーティングをしていた颯太郎は突然聞こえたノックにピクリと反応した。

「…誰だ？ どうぞー」

颯太郎が促すと、部室のドアが開いた。そこにいたのは、鹿毛に白いメツシュ…一般的に『流星』と呼ばれる模様が入った毛のウマ娘…トウカイテイオーだった。

「あ、テイオーちゃんだ！」

「ここはスピカの部屋じゃないが…」

「違うよ。えつとね、カイチョーが、ここにカイチョーより脚が速い、世界最速がいてるって聞いたんだけど…マヤノじゃないよね？」

「(シンボリドルフもタチが悪いな)…あ、それ多分俺だわ」

「ええ？うっそだあ！ウマ娘より速いヒトなんて聞いたことないよ」

「…ほう。いいだろう。ちょうどジャージも着てるんなら話は早い。教えてやろう。俺に常識は通用しないってな」

ゆつくりと立ち上がり、グラウンドへ向かう颯太郎は、鋭い笑みを浮かべていた。

?????????

「とゆーことで公平性の維持のため、沖野さん、頼むぜ」

「お、おう…」

ギツギツと屈伸をしている颯太郎と、いつでも準備完了な顔をしているトウカイテイオーは、スタートラインに並ぶ。今回は実際のレースを想定した芝2000メートル(バ場状態『良』)でのタイムマンレースだ。審判及びタイム測定は、トウカイテイオーが

所属する『チームスピカ』のトレーナーであり、颯太郎の先輩でもある沖野だ。

「…では、双方構えて」

「ふっふっくん！」

「…さて、どこまでいけるかな？」

「スタート!!」

沖野のその言葉と同時に、トウカイテイオーは勢いよくスタートした。が…当の颯太郎は敬礼のように手を額に当て、トウカイテイオーの様子を見ている。

「(……………どういうつもり? やっぱり、もう負けを認めたってこと?)」

トウカイテイオーはそう思いながら走り、ちょうど1000メートルのポールの直前まで来た。

「…うっし、ほんじゃま全開で行きますか……」

その様子を見て、腕時計でスタートしてからそろそろ1分が経つこと確認した颯太郎は両の拳をターフに突き刺し、足を極限まで踏み込む独特のクラウチングスタートの構えを取った。そして…

「…『必殺』ガチッシリーズ』……………」

『ガチダツシュ』
!!!!!!
」

…瞬間、音が突き抜けた。

恐ろしい速さで疾走する。それ。それは、瞬く間に1000メートル以上先にいたトウカイテイオーを追い越し、ゴールである1周を走り終えた。

沖野がタイムを測ると、ストップウォッチには『1:06』とあった。

「……………沖野さん、タイムは？」

「……………1:06……………」

「ま、1分待ったことを考えると6秒ぐらいか？個人的には5秒前半辺りに入りたいんだよな」

トントンと軽くジャンプしながらサラリとそんなことを颯太郎が言っていると、トウカイテイオーも1分程遅れてゴールインした。

「お、早かったじゃねえか。いつ追い越した？」

「……………わ、ワ…」

「ワケワカンナイヨー!!」

トウカイテイオーの渾身のツツコミが炸裂した。

「何今の!? すっごい風だったよ!？」

「全力ダツシユした。ただそれだけ」

「ええ!? 嘘でしょ!!? ウマ娘より速いヒトなんてホントにいたの!？」

「…………シンボリフドルフの言う通り、俺に勝てたら、間違はなくお前は世界最速のウマ娘を名乗っても過言じゃあないだろう。だが、簡単には俺は越えられねえぞ? 今も尚呆然としているお前に、俺のモットーを教えてやろう」

「追跡!」

「大逃げ!!」

「いずれも…」

「マツハ!!!」

パンツと右拳を左手に当て、ビシリとキメた颯太郎はトウカイテイオーに続けていった。

「これが、『チームミーター』のトレーナー…この『真波颯太郎』の流儀だ。覚えて帰りな」

そして颯太郎が部室に戻ろうとした時だった。

「見つけましたわあああ!!!」

『!?!』

「ゲツ、面倒なのが来やがった」

ズドドドドと豪快な音を立ててこちらに全力疾走してきたのは、トウカイテイオーと同じく鹿毛のウマ娘…カワカミプリンセスだ。

「私の王子様ああああ!!!」

そう叫びながらピヨーンとジャンプして颯太郎にカワカミプリンセスが飛びかかったが…

「ほい」

颯太郎はスルリと身を引いて避けた。そしてその先にいたのは…未だストップウオッチを握っている沖野だった。

「へ!?!ちよ、おどきになってええええ!!?!」

「いや無茶言うんごふうううー!!!?!」

「あ、ごめん」

カワカミプリンセスからの人間ミサイルならぬカワカミサイルを真正面からくらった沖野はそのまま吹っ飛ばされたのでありましたとさ。

世界を旅する飛行タイプ使い ID : 16 a M a G a g

A I B O

第1話『翼は駆ける、蒼空を』

豊かな自然と独特の文化を持つ土地：ジョウト地方。

そこにある最大級のポケモンスタジアムでは、ジョウトの王を決める戦いが始まりかけていた。

『さあ皆、いよいよこの時がやってきたぜ!! 数多の強豪たちを退けたチャレンジャーと、ジョウトを代表する現チャンピオン!!! 真正正銘、この地方の最強を決める戦いが、いよいよ始まる! まずはサウスサイドから、エリートなチャレンジャーの登場だ!!!』

観客席から強い歓声が響く中、サウスサイドの入口にスポットライトが集中し、モークが吹き出る。そこから現れたのは、唾を後ろにした帽子の上にゴーグルをかけ、何故かビリヤードのキューを持つ少年だ。

『『躰す者』の異名を持ち、その仲間と共に他のチャレンジャーを圧・倒!!!破竹の勢いで現れた超新星!!チャレンジャー!・ゴールドオオ!!』

少年…：ゴールドは天に向かってガッツポーズを取り、歓声に応えると、歓声はより一層強まる。

『そして皆さん、お待ちかね!!幾つもの土地を跨ぎ、あらゆる事件を見事に解決!その強さは正しく、天の地の差か!!?カントー出身、ガラルで育った、異色経歴チャンピオン!!』
実況の言葉と共に、今度はノースサイドにスポットライトが集中し、スモークが吹き出る。

『ノースサイドから登場!!!チャンピオン・ツバサアア……って、あれ?チャンピオン???

ちよつと、どーなつてんの!？」

実況が間抜けな声を出す。それもそのはず、いつまで経つてもノースサイドからチャ
ンピオンが現れない。と、一人の観客が自分にかかる影に気づき、上を見上げて大きな
声を出した。

「?……………おいアレ!!上だ!!!」

その声を聞いた全員が上を見る。そして…

「……………いやっハア~~~~!!!」

一人の男がポケモンに乗って急降下してきた。まるで白金を彷彿とさせる大きな金
属質の鴉のようなポケモン…色違いのアーマーガアはその巨体に似合わない機敏さで
翼をはためかせてホバリングすると、ドスンと着地して頸を下げ、男…ツバサを地面に
降ろす。

「ありがとな、『オウガ』。ほい」

「ガアッ！」

ツバサは背中のバッグから大きな桃：モモンのみをアーマーガア：オウガに放り投げる。オウガは器用にそれを嘴でキャッチし、そのままバリボリと咀嚼し始めた。

『おいおいチャンピオン!!! いったいどこまで行つてたんだよ! 今日試合だろ!』

「すまん。ちよつとハウオリシテイまでマラサダ買いに行つてたわ。オウガならひとつ飛びだし」

『フツリイ〜〜ダアアム!! この男の辞書に束縛という文字は無いのかあ!』

なんとこの男、比較的近いとは言え普通なら飛行機で数時間にかかるアローラ地方の大都市、ハウオリシテイまでマラサダを買いに行つていたので。無論挑戦者であるゴールドは顔をひきつらせている。

「ふざけてんのかよ、チャンピオン」

「んん? おく、お前がチャレンジャーか。……………うん、良い面してるな。ポケモンたちと

のコミュニケーションも上々か。大変よろしい。あと、バトルの時は割と気を引き締めていくタイプだから、期待してくれていいぜ？」

『……………えつと…と、取り敢えず！チャンピオンも現れた！ルールは交代アリ、伝説幻禁止の66フルバトルだ！道具は持ち物のみOK！互いの全てをぶつけちまえ!!』

「両者、ポケモンをー！」

実況の言葉と共に審判が現れる。その合図に合わせて二人はボールを出し…ゴールドはキューで突き、ツバサは空高く放り投げた。

「いけつ、エーたろう！」

「フワライド、テイクオフ!!」

「エーテツ！」

「フ〜ワ〜」

ボールから出た互いのポケモン…ゴールドのエーたろうことエテボース、ツバサのフワライドは互いに向き合い、戦闘態勢に入った。

「何だあのポケモン……でも、まずはこれだ！エーたろう！『ねこだまし』！」
「フワライド、『ちいさくなる』！」

ツバサのフワライドは縮小しようとするが、それよりもエテボースのその身体の大きさは不釣り合いな大きな二股の尻尾が迫る。が…

「エテッ!？」

「はあ!!？」

エテボースの手はフワライドをすり抜けた。その間にフワライドはどんどん縮んでいく。それを見たゴールドはすぐに結論に辿り着いた。

「…ゴーストタイプか！」

「そういうこと。事前にお勉強ぐらいしときな。フワライド！もう二回『ちいさくなる』！」

「フッワッ！」

そうして続けて二回縮小したフワライドは、最早視認すらも困難になってしまった。それを見届けたツバサは次の段階に入る。

「フワライド！次はひたすら『たくわえる』！」

「フワフワフワツ！！」

「くそっ！エーたろう！『れいとうパンチ』！」

「エ〜テツ！…エテツ!?」

ツバサの指示を受けたフワライドは綺麗なエネルギーをどんどんその身体に吸収していく。ゴールドはさせじとエテボースに指示をするも、エテボースの尻尾は空を切るばかりだ。やがて計6回の『たくわえる』を使ったフワライドにツバサは次の指示を出した。

「よくやったフワライド！『ボタンタッチ』！」

「フワツ！」

ツバサの指示を聞くと、フワライドはエネルギーで形成されたボタンを握った直後、

ツバサが持つボールの中へと戻っていった。

『おっと、チャンピオンがここでポケモン交代！次は何を出す気だア!?』

『この流れでツバサ選手が出すポケモンはアレ以外はあり得ませんよ』

『行つてこいカイリユー!』

「バアウツ!!」

ツバサの腰のボールが独りでに開き、中から次のポケモンが現れた。現れたのは、黄色い肌に対の触角のようなものを持つドラゴン：通称600族と呼ばれるポケモンであるカイリユーだ。

『ツバサ選手が次に出したのはカイリユーだあ！チャレンジャーゴールド、大丈夫かあ!?!』

「カイリユー?じゃあ問題ねえ!!エーたろう!『れいとうパンチ』!!」

「エーテエツ!!」

「カイリユー!受け止めろ!!」

「バウツ!!」

カイリユーはエテボースの大きな尻尾から繰り出される極寒のパンチを真つ向から受け止めた。するとカイリユーが技を受けた腹部からパキパキと凍っていく。そして数秒後、カイリユーは氷の中に閉じ込められてしまった。

「よっしやあ!!」

「おっ!?!」

『なんとここでカイリユー、『こおり』状態になってしまった!!まさに絶体絶命かあ〜!?!』
『こおり』状態のポケモンは動けなくなる。それはポケモントレーナーの間では常識である。

「エーたろう!続けて『れいとうパンチ』!!」

「エテツ!エ〜テ〜ツ:!!」

エテボースは指示を受けてカイリユーに尻尾を振りかざしながら猛スピードで接近する。そして攻撃が繰り出される直前、ツバサはニヤリと笑って大声を出した。

「カイリユーー！ 『かえんほうしゃ』!!」

「は!!?」

ツバサが叫んだ直後、突然氷に亀裂が入った。亀裂はどんどん音を立てて大きくなり、割れたと同時に高温の炎がエテボースを包み込んだ。

「エテ~~~~ツ??」

「エーたろう!?!クソ!!なんで『こおり』状態なのに指示が:!?」

「フッフッフ:~まだまだ甘いな少年」

「んだとお!?!」

チツチツチツと人差し指をわざとらしく振ったツバサは得意気に話し始めた。

「『こおり』状態だから絶対動けないってのは間違った常識。フレアドライブやかえんほうしゃ:~炎タイプの技の一部には攻撃と同時に『こおり』状態を解除できる技があるんだ。ウチのカイリユーーはバトルスタイルの関係上序盤は技を受けがちだから。当然

対策済みさ。そして……上級者のポケモンにそうホイホイ弱点を突くのはオススメしないぜ？」

「バアウウウウウ〜!!!」

ツバサがそう言った直後、カイリユーはどこからか小さなプレートを取り出し、バツと翳す。するとプレートが光の粒に変わり、カイリユーに吸収された。そしてカイリユーは身体の中の力を解放するかのように大きな雄叫びを上げた。雄叫びはビリビリと会場全体を揺らすかのような威力だ。

「な!？」

『なぁんとオ!!!ここでカイリユー、まさかのパワーアップ!!どうなってんだア!!?』

『先ほどツバサ選手のカイリユーが出した物は、『じゃくてんほけん』と呼ばれるアイテムです。高価な割に一回限りの使い捨てではありませんが、持たせたポケモンが弱点のタイプで攻撃された時に攻撃力が倍増するという破格の効果を持っています。そして……ここからがツバサ選手のカイリユーの本領発揮ですよ』

「クソ!こうなったら無理矢理押しきってやる!エーたろう!『れいとうパンチ』!」

「エテ〜ツ!!!」

ゴールドの指示を受けたエテボースは、再びカイリユーにれいとうパンチを繰り出す。そして攻撃は再びカイリユーのどてっ腹に決まり…

…ほぼ無傷のカイリユーがそこにいた。

「エテツ!!？」

「は…!？」

「カイリユー! 『ドラゴンクロー』！」

「バアウウウウツ!!」

「エツテ~~~~ツ!!?!?!」

「エーたろう!!？」

お返しとばかりに放たれたカイリユーのドラゴンクローは、しつかりとエテボースの身体を捉え、そのままスタジアムの壁まで吹き飛ばした。カイリユーはフンスと大きな鼻息を出し、ドカンと両手を打ちつける。

「さあ、少年…いや、ゴールド君。悪いが君には味わってもらおうぜ？」
「君と俺との…天地の差を、な」

その不敵な微笑みは、ゴールドだけでなく観客すらも戦慄させた。

第2話 『次なる旅路、それってEasy?』

日もすっかり暮れ、ツバサとゴールドのバトルもいよいよ大詰めとなっていた。いや、大詰めというよりこれはむしろ…

「…ッ！」

「ふむ…どうも良い鍛え方してはいるんだが…やはり決定打が欠けてるな…なんというか…セオリー通り過ぎるんだよな…もう少しバトルに工夫、独創性を混ぜた方がいいな。セオリー通りつてのは強い反面、対策もされやすいぞ」

…蹂躪だった。フワライドとのコンボで強化されたカイリユーにゴールドのポケモンは次々に敗れ、現在はニョロトノがダウンしてしまっている。

「舐めやがって…こんな時にお説教つか!?その余裕、ぶっ壊してやるよ!バクたるう！」

「バクフウウウ!!!」

戦闘不能になったニョロトノを戻してゴールドが最後に出したのは、ジョウト地方の御三家ポケモンの最終進化の一体、バクフーンだった。

「いくぞバクたろう!あの舐めた野郎に一泡吹かせてやれ!!」

「バクオアアア!!!」

「……………なるほど、気合い十分か……………審判!」

バクフーンを見て何かを感じ取ったツバサは突然、審判に声を放った。

「この試合、悪いが少しルール変更を頼む!」

『!?!』

ツバサの突然の要請に、審判どころか観客たちもざわめき始める。

「変更内容はいたって簡単。今から出す俺のポケモンとチャレンジャーのバクフーン、

「1対1でこの勝負の決着としたい!!」

「はア!?!」

「つまり、今まで俺はカイリユウでチャレンジャーのポケモンをすべて戦闘不能にしたが、それをすべて無効とし、次に俺が出すポケモンが戦闘不能になった場合、俺の負けにしてくれ。……言っておくがチャレンジャー……いや、ゴールド君だったかな? 誤解しないでくれ」

そう言ったツバサはゴールドに向き直り、言葉を続ける。

「お前を侮るわけじゃない。寧ろ逆さ」

「?」

「…ポケモンも人間も、成長するために最も重要なのは何かわかるか? 強い能力? 潤沢なアイテム? 整った環境? 優秀な親? ……どれもあと一歩足りないんだ。じゃあ何が必要か…答えは一つ」

「危機感さ」

「危機感…!?!」

「そうだ。危機感だ。人もポケモンも、自分が明確に『ヤバイ』と感じた時に最も成長す

る。時折それは危機的状況における進化をも促す。俺は強さに貪欲なんだ。俺はお前とお前のバクフーンを見て『コイツらはヤバイ』と直感した……だからこそ、俺は自らを危機に追い込む。お前も俺も、あと一体。真正正銘、これが最終決戦だ。どうする？ 乗るか反るか、お前が決めろ」

「……………」

ゴールドが見たツバサの目に、嘘の色はまったくなかった。つまりは本気。本気でツバサはこれを最後の勝負にしようとしているのがよく理解できた。

そうとわかったゴールドの答えは一つだった。

「上等だ…やってやるよ!!!」

「…そこなくつちやな!!いくぞオウガ!!」

『ガアアアアアアア!!!』

ツバサの叫びに呼応するように、背後に控えていたオウガがバトルフィールドに降り立ち、雄叫びのような鳴き声を轟かした。

「いくぞバクたろう!!『かえんほうしゃ』!」

「バアアアアア!!!」

「オウガ!! 右斜め上52度に回避!! そのまま上昇!」

「ガツ!!」

「追撃しろバクたろう! 地面に墜としてやれ!」

「クアアアア!!」

バクフーンはオウガの弱点である炎技のかえんほうしやで撃ち落とそうとするが、ツバサの的確な指示でオウガはその巨体からは想像もできないほど軽やかに回避し続ける。時折オウガは『はがねのつばさ』で空中から何度か奇襲を仕掛け、バクフーンを弄する。バクフーンは七回ほどくらったが、一度返しのかえんほうしやでカウンターを受け、オウガにもダメージが入っている。

ここで決める。

そう考えた二人の指示は同時だった。

『『ブラストバーン』!!』

『『ブレイブバード』 + 『アイアンヘッド』!! 『特鋼大鳥』!!!』

『ガアアアアアア!!』
『バアクアアアアア!!』

ゴールドは御三家ポケモンの最終進化形が覚える究極技を、ツバサは二つの技の合わせ技をそれぞれ指示する。

そして、バクフーンの口から放たれた極温の熱線と合わせ技に回転を加え、さながら巨大な弾丸のようにバクフーンに突撃するオウガが激突し、会場に光と煙が満ちた。

光と煙が晴れたフィールドに立っていたのは…

?????????

「ここが『パルデア地方』か…テンションアガってきたな、オウガ!」
『ガア』

ゴールドとの激戦から三日後、ツバサはオウガと共に空港の入口に立っていた。ご丁寧に、ツバサはサングラスを掛け、アロハ柄の着物（おそらくはバカンス風）という訳のわからない服装をしている。

結論を言うと、三日前のバトルはツバサの勝利で幕を閉じた。ゴールドは悔しそうに話していたが、どこか清々したような顔で「また修行し直す」と言って去っていった。

そのため、ツバサもまた別の地方へ行くかとパンフレットを漁っていると、パルデア地方という聞いたこともない土地が目にとまったので、即決で来たのである。

「さて。これがパルデアへの、第一…」

そう言つて、ツバサが目にしたのは…

制服を着た中年男性だった。

「…ヘイロトム。ジュンサーさんに連絡して？」

?????????

「なあるほどねえ…」

ツバサは改めてパンフレットの中の1ページ：グレイプアカデミーに関するページを見ていた。

どうやら、このパルデア地方はテーブルシティにある巨大な学園、グレイプアカデミーが地方のメインシンボルだそうで、入学に年齢制限が無いため、中年や壮年の者でも入学できるそうだ。

失礼かもしれないが、たしかにそれを知らない人間からすれば制服を着て学校で如何わしいことをしようとする不審者にしか見えないだろう。

「文化の差って凄いやな、オウガ」

『ガ?』

道中で買ったサンドイッチ：ツバサからすれば、普通サンドイッチは食パンを使うものであって、フランスパンを使うものではないと思う物を鵜呑みにするかのようになっているオウガは、若干首を傾げながらツバサに反応する。

現在、ツバサたちはとある道路を散歩しながらポケモン探しをしていた。

と、その時。

「……………ん?」

何やら前方から土煙が上がっている。どうやら、何か走ってきているようで、ドドドと地響きのような音も聞こえてきた。そして…

『『又チャアアアアア!!!』』

「…は?」

巨大なハンマーを持つ小さなポケモンが飛び出してきた。そのままポケモンは、手にした巨大なハンマーをツバサたちに：より正確には、オウガに振るう。

「うおっ!?!」

『ガ!?!』

『『『又チャン! 又チャン! 又チャアン! 』』』

そのまま、ポケモンたちはツバサとオウガを逃がすまいと取り囲み、臨戦態勢に入る。

さて、ここで思い出して欲しい。

ツバサは転生者であり、ポケモンの言葉や心を読むことができる。

つまり、ポケモンたちの声はツバサにはこう聞こえていた。

「………はい？」
『ソザイ!ソザイ!ソザイ!ソザイ!!』

ポケモンたちが狂ったように、『ソザイ!』と叫んでいるのである。

「ロトム。コイツら何だ?」

ツバサの質問にスマホロトムは素早く答えた。

『デカヌチャン。ハンマーポケモン。フェアリー・鋼タイプ。知能が高く、とても豪快。百キロを超えるハンマーで岩を殴り飛ばして、アーマーガアを撃ち落とし、ハンマーを補強する素材にする。デカヌチャンが生息しているため、パルデア地方ではアーマーガアタクシーは運行できない』

「血迷ったかゲームフリーク」

淡々と述べられた、スマホロトムの説明に、ツバサはドン引きしていた。

「何その蛮族。つまりは俺のオウガをハンマーの素材にする、と…舐められたもんだ。オウガ」

『ガア? (どした?)』

「やっておしまい」

『ガアアアアア!!! (シャオラアアアア!)』

ツバサの指示に、オウガもまた蛮族よろしく単騎でデカヌチャンの群れに突撃していった。

つまるところ、ツバサのオウガはただのアーマーガアではないということである。

米花町のスパイダーマツ ID : Itokai Ara

I

filel : 『米花町の親愛なる隣人』

東京都、米花町。

最近この町には、とある噂がある。

『親愛なる隣人』と己を称する彼を、その独特の動きから人々はこう呼んだ。

『スパイダーマン』と。

?????????

「……………」

眼鏡を掛けた少年……とある組織の毒薬により、今は『江戸川コナン』と名乗って、自身の身体を小さくした組織を追う、高校生探偵の工藤新一は、居候している毛利探偵事務所の真下の、『喫茶ポアロ』でジュースを飲んでいた。

しかし、その目と意識はジュースとは関係ない方を向いている。

その視線の先には、サンドイッチと紅茶を横に置き、カタカタと何かをノートパソコンに打ち込んでいる黒一色の服装の青年がいた。

彼がその青年に意識を向けている理由は、彼がポアロに入って席に着いてすぐに、青年が口にした言葉だった。

「何だこの男…今日は土曜日だから、会社員の営業つてわけでもなさそうだし、黒一色………いやいや、さすがにそれはないか」

その青年は、コナンが席に着く前から一心不乱にノートパソコンの画面を見て、時折片手でサンドイッチを食べながらも、キーボードを打つ手を一切止めなかった。が、不意に手を止めた青年が放った言葉の一部は、彼に疑心を抱かせるには十分だった。

「……………やはり、ジン…」

「(ジン!!?)」

その言葉は、コナンにとっては聞き捨てならないものだった。

ジンとは、彼が追う黒づくめの組織の構成員の一人にして、自分に例の毒薬…アポトキシン4869を飲ませた張本人。彼ら組織のメンバーは、互いを酒の名前をコードネームとして呼び合う。そして、彼らは常に黒で統一された服装をしている。

青年は黒のパンツに黒い長袖のTシャツ。更に黒いパーカーを羽織り、黒で統一され

た服装だ。

「まさか、本当に奴らの仲間か…!?」

「……………さて」

「！」

ボタンとノートパソコンを閉じ、会計のためにレジへ向かう青年に、コナンはこっそり小さなボタン型の発信器を指で弾き飛ばした。

発信器が青年のパンツの裾に付いたことと、青年が会計を終わらせてポアロを出たのを確認し、コナンも会計を終えて追跡を始めた。

自身の眼鏡のボタンを押して、青年と一定の距離を置きながらコナンは青年の後を追う。

「（この先は公園…奴らと待ち合わせか？）」

発信器の電波が公園で停止したのを見ながら、コナンは公園に入る。そして茂みからそつと顔を覗かせた彼が目にしたのは…

ベンチで休んでいる、一匹の猫だった。

「…猫？」

コナンは目を疑いながらも、そつと猫に近づく。猫は人懐っこいのか、コナンの近くに寄ってきた。コナンはそつと猫を抱えて背中を見ると、自分が青年に付けたはずの発信器が付いていた。しかも、何やらメモが貼られている。

「何だこれ…？」

メモを取ると、そこにはこう書かれていた。

『詰めが甘い』

「そう。詰めが甘い」

「!？」

思わず猫を手放し、コナンはバツと後ろを振り向く。猫は驚いたのか、逃げていった。

そこには、先ほど発信器を付けた青年が、缶コーヒーとジュースを両手に持つて立っていた。

「少々文明の利器に頼りすぎだよ、少年。……まあ、私が言えた義理ではないがね」
「お前……！」

青年に意識を向けつつ、後ろ手で自身の時計……より正確には、腕時計型麻醉銃をいつでも発射できるように準備する。

「それは今この瞬間にも言えることだ。普通の子供なら距離を取るか、大声で助けを呼ぶところだが、一步も動いていない。恐怖で足がすくんでいるともとれるが、目が恐怖に染まっていない。それは則ち、『形勢を変える手がまだある』ということだ。大方、その後ろ手に回した時計か何かかな？」
「なっ!?!」

コナンは目を見開いた。青年は冷静に、そして的確に彼の次の手を予測してみせたからだ。

「…安心したまえ。私は、君が想定している者ではない。寧ろ逆なんだけどね」

「…どういうことだ」

「簡単だよ。この服装は撒き餌さ。君のように、黒づくめの組織を追う者を見つけるための、ね」

「…ツ!? てことは、アンタも奴らを…!」

「『も』ということは、やはり奴らを追っているのか」

「あ…!」

「そう焦らなくてもいい。だが、一応事情を聞かせてくれないかい?」

「……………まず、アンタは誰なんだ?」

「ああ失敬。申し遅れた。私はこういう者だ」

そうやって青年は懐から名刺を取り出し、コナンに手渡して名乗った。

「『警視庁特別技術顧問』、副業で投資家をしている『雲波糸司』だ。」

「特別技術顧問…?」

「顧問と言っても、私の発明品の一部を警視庁に提供しているだけだがね。そして君は

「?…まあ、言わなくても大体察しはついている。そうだろう? 工藤新一君」
「!!?」

唐突に自身の正体を言い当てた糸司に、コナンは動揺を顔に出した。小学校低学年の姿となつている今の彼を、どうやって工藤新一と見抜いたのか、理解できなかったからだ。

「少し考えればわかる話だ。まず、最近までそれなりにメディアに露出していた君が、ある日パツタリ姿を見せなくなった。海外で事件解決に勤しんでいる、とも聞くが、それにしては海外での目撃情報が無い。つまり、何らかのトラブルでも起きたと考えるのが自然だ。そして奴らを追っている少年…小学生にしては肝も座りすぎている上に、すぐさま次の一手を考える。おおよそただの小学生ではない…これらを組み合わせると、そう結論づけないと逆におかしい。…立ち話もなんだ。ついてきなさい」

そう言つて踵を返した糸司に、コナンはまだ少し怪しみながらもついていった。

?????????

「ここが私の自宅だ」

「おい嘘だろ…!?!」

コナンは再び自身の目を疑っていた。

なぜなら、糸司の自宅は彼の眼鏡や腕時計を開発した阿笠博士の家の隣、つまり彼の工藤新一としての自宅の二つ隣だったからだ。

「さ、どうぞぞ」

「……………」

糸司はコナンを連れて廊下を歩く。そして、二階へ上がる階段の隣で不意に足を止め、壁の方を向いた。

「さて、私は君の秘密を知った。ならばこれから君には相応の秘密を此方も明かさなければフェアじゃあない。その秘密は、この壁の先にある」

「秘密って…見た感じ、ただの壁だろ」

「君にはもう少し、ロマンを理解してほしいね。こういうことさ」

「は!?!」

その言葉と同時に糸司が壁を押し込むと、壁の一部が開いて何かの装置をセットする台座が現れた。そこに糸司はスマホ型のデバイスをセットし、暗証番号を打ち込む。すると、今度はその左隣の壁がスライドして、エレベーターの扉が出てきた。その様子は、さながら近未来の秘密基地だ。

「入りたまえ」

「…何がどうなってるんだ」

「来ればわかるさ」

そして二人はエレベーターに乗って地下に着く。そしてドアを開けると、今度は金庫のようないかにも頑丈そうな扉と、その右隣には手の形の線が描かれた台座があった。

「さあ、私のラボにようこそ」

糸司が台座に手を置くと、指紋認証が完了して扉が展開される。

そこには、様々な機械や工具、失敗作らしきガラクタが散乱しており、壁にはパワードスーツのような鎧が保存されていた。

そして何よりコナンの目を引いたのは、ラボの中央にあつた蜘蛛のような全身スーツだった。

「このスーツって……まさかアンタ……!!」

「その通り。私の正体は……」

そう言いながら、糸司はパーカーを脱ぎ捨て、シャツに付いている蜘蛛のようなワッペンを押し込んだ。すると、ワッペンから流動する機械……ナノマシンが展開され、瞬く間に糸司の身体を包んだ。そのまま糸司はナノマシンが身体を完全に包むと同時にバク転し、ビシツと構えを取り……

「地獄からの使者！スパイダーマツ！！」

スパイダーマンが、そこにいた。

東京皇国のゴーストライダー ID：hE1bA1K3

15

第壹話『裁炎の骸』

人の死因にも、色々あります。

老衰、自殺、病死：科学的な死から不可思議な死まで、人の生まれ方より遥かに多い種類が。

しかし、今この世界において最も多い死因は…

DEATH
BY
FIRE
焼死です。

?????????

拜啓、向こうで今も農家を営んでいるであろう父様、母様。
死んだ身で厚かましいですが、今一度お願いがあります。

「何ダアてメえハア!!？」

「ほ、焔ビトがもう一体…!？」

今の自分を、助けてクレメンズ。

?????????

そもそも、生前の私は日本の山奥…とまでは行かずとも、やや都会寄りの田舎ともいうべき地域の農家の出でした。高速や鉄道へのアクセスもそれなりに良く、それでいて

自然豊かな所で、果物を中心とした農家をしていました。

そして私はと言うと、農家の手伝いこそしていましたが、テレビでやっていた世界中の格闘家による総合勝ち抜きバトルロワイヤルという、全く異なる格闘技を極めた格闘家同士が試合をすれば、どの格闘技を極めた者が頂点に立つのか、というコンセプトの番組を一目して、その中で繰り出される数々の武術の美しさに一目惚れ、大学卒業後は各国の武術、格闘技を巡る独り旅に出ました。

親は「やりたいようにやってこい！」とおおらかな言葉で送り出してくれましたよ。今考えるとその土地でやってた大会とかで優勝したりして貰った賞金の半分くらいを仕送りしたりぐらいいしか大学卒業後は孝行できてなかったなあ…

でも、まさか土砂崩れに巻き込まれてそのまま死んでしまうとは…まあでも、岩盤をなんとか支えて逃がしたあの一家、助かったろうか…

いや、今はこの謎過ぎる状況を何とかせねば。

まずは人助けだ。

「はあっ!!」

「ぶへっ!?!」

初手は開幕ドロップキック。おそらく裁判官と思われる人を燃やそうとしている発火ゾンビの横っ腹に重たいのが入った。そのまま発火ゾンビを吹っ飛ばし、すぐさま裁判官と発火ゾンビの間に割り入り、左足を前、右足を右斜め後ろに、腰を深く落とし、左手はいつでも掴みからの投げ技をできるように開け、右手は中指だけを根本の関節に軽く当てながら、ゆったりとした握り拳を作る戦闘態勢に入る。

「今すぐ逃げてくださいー!ここがどこなのかはわかりませんが、奴の近くに居るのは危険です!」

「は、はい!!」

「…!くっ!!」

慌てて逃げようとする裁判官の方へ、先ほど発火ゾンビを吹き飛ばした方から炎の

ロープのようなものが一直線に伸びていく。咄嗟にそれを掴み、すぐさま右腕に巻きつけて手繰り寄せながら追加で顎へ飛び膝蹴りをかます。

「オげっ!? こんのお!!」

「舐める、なッ!! (こんな狭い空間で戦うのは分が悪い! まず外に出て仕切り直さないと!)」

そのまま相手が飛ばしてきた炎のロープを使って、外の方へ誘導しながら格闘戦を繰り返し、やがて二人(?) は裁判所の扉を破りながら外へ転がり出た。

「ウツとうしい!! てメえ、焔ビトだろオが! なんて俺ヲ殴ルんだヨ、アあ!」

『焔ビト』: : : それがお前の名か: : : : : ん?」

ちよつと待て、今コイツ何て言った?

てメえ、焔ビトだろ…？

てか、よく見たら手が燃えて骨…あれ？

それによく見たら、いつの間にか着ていた黒いライダーも、身体に巻かれてる鎖も同じ炎で…

「燃えてエエエエ!!!」

「ゴふエえええ!!!」

次の瞬間、私の目の前で発火ゾンビ：焰ビトは、いきなり飛んできた少年のキックをくらって、少年の上に乗っていた金髪の少年と一緒にゴロゴロと地面をローリングしていった。更に起き上がった焰ビトは、金髪の少年の裏拳をくらって更に後ろへ吹き飛ばされる。

「ええ…?」

目の前で起きた出来事に目を疑って、ごしごしと目を擦る。そして改めてその手や足、身体を見ると、私は全身を黒の生地に銀色の装飾を施したライダーを身に纏い、その上から炎上していた。

「でも、これどつかで見たことあるような…あ」

そうだ、思い出した。たしか、アメリカのTSOTAYAみたいな店のDVDコーナーにあった、洋画の…たしかタイトルは…

『ゴーストライダー』…? って危なッ、い!」

そう呟いていると、突然左から蹴りが飛んでくるので、反射的に足を両手で掴んでそのまま左手を上にも両手斧を振り下ろすような形で投げ飛ばす。蹴りを入れようとした張本人…黒髪の少年は投げ技にこそ驚いたようだが、すぐに着地し、足から炎を吹き出して構える。

「どちら様ですか…!?!」

「第8特殊消防隊だ!! 焔ビト!」

「…消防隊? 今時の消防隊って、火を足から出すんですか? えつと…一応お聞きしたいんですが、どこのどういった流派なのかお教えいただければ嬉しいんですけど…」

「ハア……!？」

「あ、自分、昔から武術が好きでして。できればお教えいただけると幸いなんです……あ、あと先ほどから仰られている『焔ビト』についてもお教えいただけると嬉しんですが……焔ビトって何ですか？」

「お前、焔ビトなんだろ!?!なんで焔ビトが焔ビトのことを知りたがるんだ!?!」

「いやあの、一応私も自分の今の見た目とか、この状況に混乱してまして……えっと、焔ビトって、燃えてる以外に何か特徴みたいなのはありますか?もしかしたら、それで判別できるかもしれませんし」

「……じゃあ、核はどこだ」

「核………?核と言うと……心臓みたいなもので良いんですかね?えっと……あれ?私これ心臓あるんですか?」

一応ライダースの中の身体(身体と言っても実際は骨だけだが)をまさぐって、胸骨の裏側などに手をつ突っ込むが、核のような固体物は骨以外見つからなかった。

「……まさか、核が無いのか!?!じゃあお前、なんで生きてるんだよ!?!」

「いや、なんでと言われましても……少なくとも自分とアレを一緒にされるのは酷いですよ。まず私、人を殺したとことかありませんし」

「はあ……？」

「……あと、あちらのお仲間さん、助けた方が良いのでは？」

「ああ、アイツは大丈……」

「『プスプス・コメット』！」

「！避けて!!」

「うおっ!?!」

ゴーストライダーは咄嗟に少年を突き飛ばして間を空けると、そこを特大の人魂のような炎が通り過ぎ……焔ビトの正拳突きで消滅した。

「プスプス・コメットさくらん!?!」

「け、怪我は無いですか!?!」

「……あ、ハイ!?!」

「危ないですよお姉さん!!仲間を巻き込む勢いでしたよ今の!私はまだしも、彼に当たってたらどうするつもりだったんですか!?!」

「え!?!え、えと……す、すみません……」

「私じゃなくて、彼に謝ってあげてください！」

「ご、ごめんね森羅くん……」

「……………もしかして、良い人……?」

血相を変えて、女性…：茉希に詰め寄り、なぜか説教を始めたのを見て、少年…：森羅は頭に疑問符を浮かべていた。

「本当に喋っているな…：自我が残っているのか」

「生への執着や意思が強いと、生前の性質が残りますが、あそこまでの………おい森羅。そして茉希。お前たち何をしている……!」

そこへ、茉希と同じ服装をした二人組の男がやって来たのを見て、ゴーストライダーはズンズンと歩み寄る。

「貴方たちが彼女の上司ですね!?!彼女にはどういう教育してるんですか!?!彼女が飛ばした火、危うく彼も巻き添えになるところでしたよ!?!私に飛ばすのは…：まあ、こんな見た目だから飛ばされてもおかしくないかもですけど、彼に当たってたらどうするつもり

だったんですか!？」

「……………大隊長。この焔ビト、何か妙です」

「そうだな…少なくとも、焔ビトに部下のことで叱られたのは人生で初めての経験だ…名前は何？」

「名前?名前ですか……………ゴストラ、ですかね…?」

生前の名前を名乗るのは何だか違うような気がしたので取り敢えずゴーストライダーを略したが、どうやらそれで受け入れられたようだ。

「ゴストラか…森羅を助けてくれたこと、感謝する」

「ああいえ、自分は人を襲ったりとか、そんなことをするつもりは毛頭無いので。こちらにも攻撃をした当事者でもないのに、すみませんね」

「いや、部下の責任は俺の監督不行きだ…あと、一応聞きたいんだが…焔ビト…なのかな?」

「いや、それが自分にもサッパリで…彼が言うには、焔ビトには核があるそうなんですけど…私の中に、核ありますか?自分で見ただけだといまいちわからなくて…」

そう言つてゴストラはライダーズを脱ぐと、男：第8特殊消防隊大隊長の秋樽と、眼鏡の男：中隊長の武久はゴストラの骨と炎だけの身体を観察するが、核らしきものは見つからなかった。

「…いや、無いな。どうやって生きてるんだ？」

「さあ…その辺りは私にもサツパリでして………つてしまった!!待て!!」

『!?』

「遅エよばアアカ!!!」

ゴストラが秋樽たちと話している隙に、焔ビトは見た目相応の跳躍力で逃げていった。

「森羅!!追え!この中で奴を追えるのはお前だけだ!!」

「ツはい!!」

「私も追います!奴を逃がしたのは私のせいですので。皆さんが追いつくまで、彼のアシストぐらいはお任せを!」

そうやってゴストラは人差し指と親指を歯だけの口に啞え…高い指笛を鳴らした。

「!?何を……………この音は…?」

すると、空の彼方から、両サイドにボンベのようなブースターを付け、ゴストラ同様にタイヤなどが燃えている禍々しいバイク…ヘルバイクが飛んできて、ゴストラの前に着陸した。ゴストラはそれに跨がると、何かの感覚を感じ取った。

「(これは…知識…?いや、感覚だ。わかる。初めて触れるのに、まるで自分の手足みただいだ。) いきますー!」

そう言った直後、ボンベ…ヘルアクセラレーターからジェット噴射のように炎が吹き出し、ゴストラは森羅が残した飛行機雲を追って空へ消えていった。

「…桜備大隊長。奴は何者なんでしょうか」

「さあな。だが…味方なのは間違いなさそうだ」

秋樽には、どこか確信めいたものがあつた。